

浅川扇状地遺跡群

二ツ宮遺跡・本掘遺跡・ 柳田遺跡・稲添遺跡

—第2分冊・準用河川新田川改修事業に伴う発掘調査報告書—

1992・3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化と共に「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできぬ、貴重な国民的財産であると考えます。

特に埋蔵文化財は、直接大地に刻み込まれた歴史であり、当時の物質文化のみならず信仰・宗教等の精神史など、文化の始源をも内包する基準資料であり、埋蔵文化財そのものが歴史・文化を考えるうえでの実証者といえましょう。

このたび長野市稲田徳間土地区画整理事業に関連する準用河川新田川改修事業にともない、浅川扇状地遺跡群二ツ宮遺跡・本堀遺跡の発掘調査を実施いたしました。

事業予定地周辺は過去の調査で重要な埋蔵文化財が発見されており、古代史研究上注目されていた地域であり、今回の調査でもそれぞれ多大な成果が得られました。

本書はその成果を要約し、長野市の埋蔵文化財第47集として報告するものです。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり多大なご援助・ご指導を賜りました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成4年3月

長野市教育委員会 教育長 奥村 秀雄

例 言

- 1 本書は準用河川新田川改修事業にともない実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は長野市教育委員会が実施した。
- 3 調査地は長野市大字稲田、同大字徳間に位置する。
- 4 本書は矢口の指導のもとに千野が執筆・編集した。
- 5 調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）で保管している。
- 6 本書は調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。

資料掲載の要領は下記の通りである。

・資料は検出されたものの中から、時期の明確に把握しうるものを中心に掲載した。ただし特殊なものはこの限りではない。時期・性格等不明瞭なものは資料掲載の対象から外したが、これらに関しては図面・出土遺物等閲覧し得るように保管してある。

・遺構番号は調査時に用いた仮番号をそのまま用いた。またすべての遺構を掲載しているわけではないので必ずしも通し番号にはなっていない点、ご理解願いたい。

・遺構の測量は写真測量研究所に委託し、コーディックシステムにより1：20の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に1：80の縮尺に統一してある。ただし遺物出土状況等微細を要するものに関してはこの限りではない。

・遺物実測図に関しては基本的に土器1：4、土器拓影1：3に統一してあるが、その他のものについては適宜縮尺を明示してある。

・土器実測図のうち弥生時代の赤彩品は  で表現してある。

・出土土器観察表の記述は下記の要領で行なった。

番号：図版番号と一致する。

法量：実際の計測値ならびに推定復元による計測値を記した。

遺存度：図示した部分の遺存度を記した。

色調：灰白色（A）・淡黄燈色（B）・暗黄燈色（C）・暗褐色（D）・黒褐色（E）とし、中間的なものはA B・B Cなどと表示した。

目 次

序	
例 言	
第1章 調査経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の体制	2
第2章 調査地周辺の考古学的環境	4
第3章 調 査	6
1 調査概要	6
2 遺構・遺物	11
第4章 総 括	36

挿 図 目 次

図1 調査地ならびに調査地周辺の地形	3
図2 調査地周辺遺跡分布図	5
図3 軒平瓦拓影	6
図4 ニツ宮遺跡A区調査区全測図	7
図5 ニツ宮遺跡B区・本堀遺跡調査区全測図	9
図6 A区1号住居址実測図	11
図7 A区1号住居址出土土器実測図・拓影	12
図8 A区2号住居址実測図	14
図9 A区3号住居址実測図	15
図10 A区3号住居址出土土器拓影	15
図11 A区3号住居址出土土器実測図	16
図12 A区4号住居址実測図	16
図13 A区4号住居址出土土器実測図・拓影	17
図14 A区6号住居址実測図	18
図15 A区6号住居址出土土器実測図	19
図16 A区6号住居址出土土器拓影①	19
図17 A区6号住居址出土土器拓影②	20
図18 A区7号住居址実測図	20
図19 A区7号住居址出土土器実測図	20
図20 A区7号住居址出土土器拓影	21
図21 A区9号住居址実測図・出土土器実測図	21
図22 A区9号住居址出土土器拓影	22
図23 A区10号住居址実測図	22
図24 A区10号住居址出土土器実測図	23
図25 A区1号土壇土器出土状況実測図	24
図26 A区1号土壇出土土器実測図	24
図27 A区1号土壇出土土器拓影	25
図28 A区5号土壇実測図	25
図29 A区5号土壇出土土器実測図	26
図30 A区5号土壇出土土器拓影	27
図31 A区6号土壇実測図	27
図32 A区7号土壇実測図	27
図33 A区7号土壇出土土器実測図	28
図34 A区7号土壇出土土器拓影	29
図35 A区8号土壇実測図	30
図36 A区8号土壇出土土器実測図	30
図37 A区11号・12号土壇実測図	31
図38 A区11号土壇出土土器実測図	31
図39 A区12号土壇出土土器実測図	32
出土土器観察表1	33
出土土器観察表2	34
出土土器観察表3	35

第1章 調査経過

1 調査に至る経過

長野市稲田・徳間地籍は、地理的には浅川によって形成された浅川扇状地上に位置し、現在の地目は、北西から南東へ傾斜する地形の大部分が、畑地や果樹園として利用され、もっとも低位置となるJR信越線付近に水田が展開する。

昭和63年、この地域において市街地の造成を目的とした、事業面積約45haにも及ぶ長野市稲田徳間土地区画整理事業が開始され、長野市建設部河川課ではこの区画整理事業に関連して、河川延長約1.2kmに及ぶ準用河川新田川改修事業を実施することとなった。事業予定地は周知の「浅川扇状地遺跡群」の範囲内に位置するため、長野市教育委員会は同建設部河川課の委託を受け、事業実施以前に記録保存を目的とする発掘調査を実施することになった。

調査開始以前の分布調査の結果、事業予定地には字ニツ宮地籍に2箇所、字本堀地籍に一箇所の遺物散布地が確認され、それぞれニツ宮遺跡A地区・B地区、本堀遺跡として把握し調査に入った。

本調査は昭和63年から開始され、工事工程・他遺跡調査日程との調整から以下の2次にわたって実施した。

1次調査 昭和63年12月5日～12月27日（ニツ宮遺跡A・B区）

2次調査 平成元年8月2日～8月22日（本堀遺跡）

また本報告書作成に関わる整理作業は平成3年度に実施した。



ニツ宮遺跡 A区 近景

2 調査の体制

(1) 昭和63年度の調査

調査主体者 長野市教育委員会教育長 奥村 秀雄
 総括責任者 市埋蔵文化財センター所長 諏訪部和彦
 庶務係 " 所長補佐 小山 正
 " " 職員 青木 厚子
 調査係 " 調査係長 矢口 忠良
 " 主事 青木 和明
 " 主事 千野 浩
 " 専門員 中殿 章子
 " 専門員 横山かよ子
 " 専門主事 小松 安和
 " 専門主事 中沢 克己
 " 専門主事 大室 昂
 参加者 金子麻子 金子ゆき 小林志げる 佐藤
 君江 佐藤はま 佐藤秀子 田中重二郎 美谷島昇
 神頭幸雄 柄沢清志 川島邦子 丸山悦子 小林キミ
 子 横山春男 長原亀雄 宮沢茂 新津芳子 吉沢申
 一 長原善雄
 整理作業参加者 徳成奈於子 岡沢治子

(2) 平成元年度の調査

調査主体者 長野市教育委員会教育長 奥村 秀雄
 総括責任者 市埋蔵文化財センター所長 水沢 国男
 庶務係 " 主幹 小山 正
 " " 職員 青木 厚子
 調査係 " 調査係長 矢口 忠良
 " 主事 青木 和明
 " 主事 千野 浩
 " 専門員 中殿 章子
 " 専門員 横山かよ子
 " 専門主事 小松 安和
 " 専門主事 中沢 克己
 " 専門主事 大室 昂
 参加者 新津三千子 金子ゆき 小林綾子 丸山
 律子 吉沢秋子 中沢慶子 成田りん 長原邦子 林
 貞子 神頭幸雄 美谷島昇 長原亀雄 両角吉之丞

宮沢茂人

整理作業参加者 徳成奈於子 岡沢治子

(3) 平成3年度の調査（整理作業）

調査主体者 長野市教育委員会教育長 奥村 秀雄
 総括責任者 市埋蔵文化財センター所長 小山 正
 庶務係 " 所長補佐 山中 武徳
 " " 職員 青木 厚子
 調査係 " 調査係長 矢口 忠良
 " 主事 青木 和明
 " 主事 千野 浩
 " 主事 飯島 哲也
 " 専門員 中殿 章子
 " 専門員 横山かよ子
 " 専門員 森泉かよ子
 " 専門主事 太田 重成
 " 専門主事 小松 安和
 " 専門主事 羽場 卓雄
 調査員 青木善子 寺島孝典
 参加者 岡沢治子 徳成奈於子 池田見紀 小泉
 ひろ美 西尾千枝 向山純子 笠井敦子



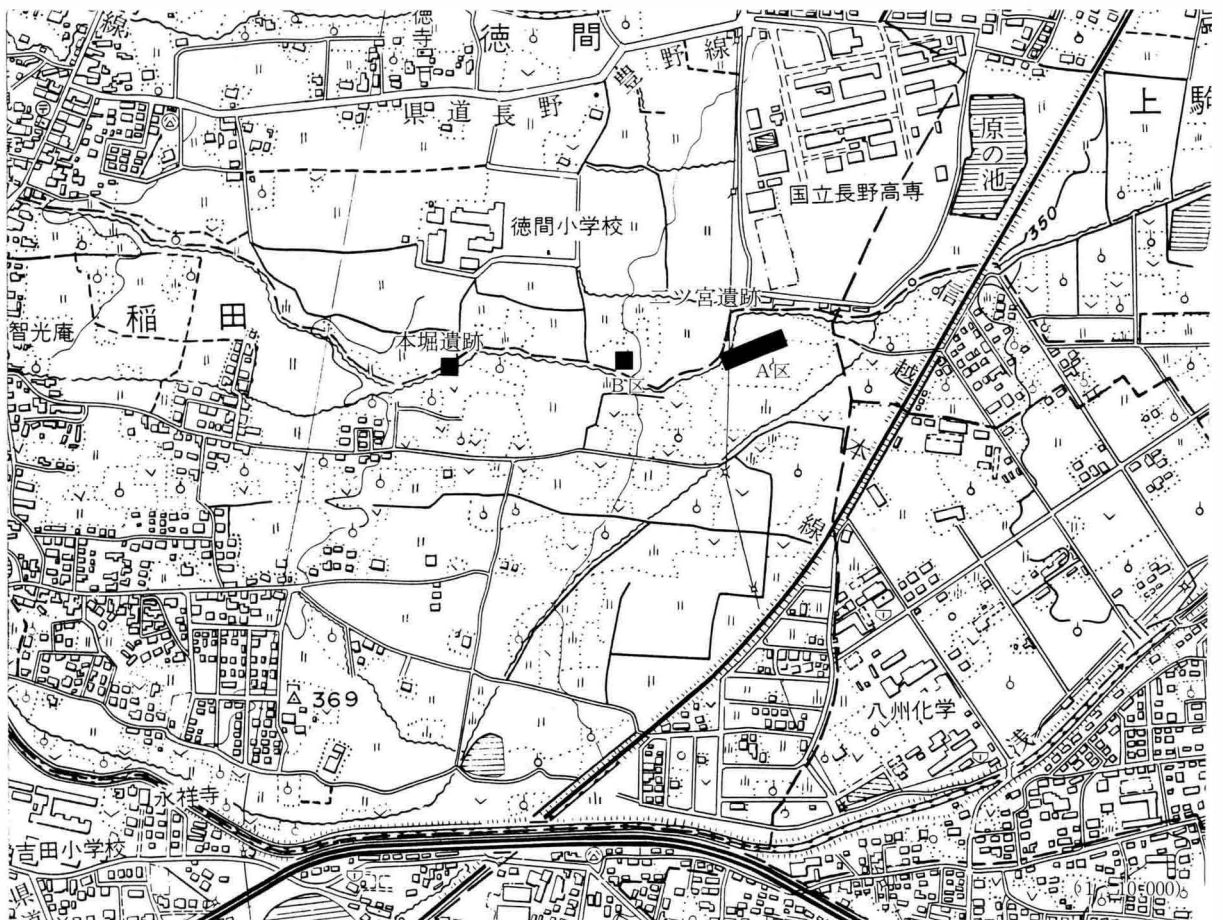
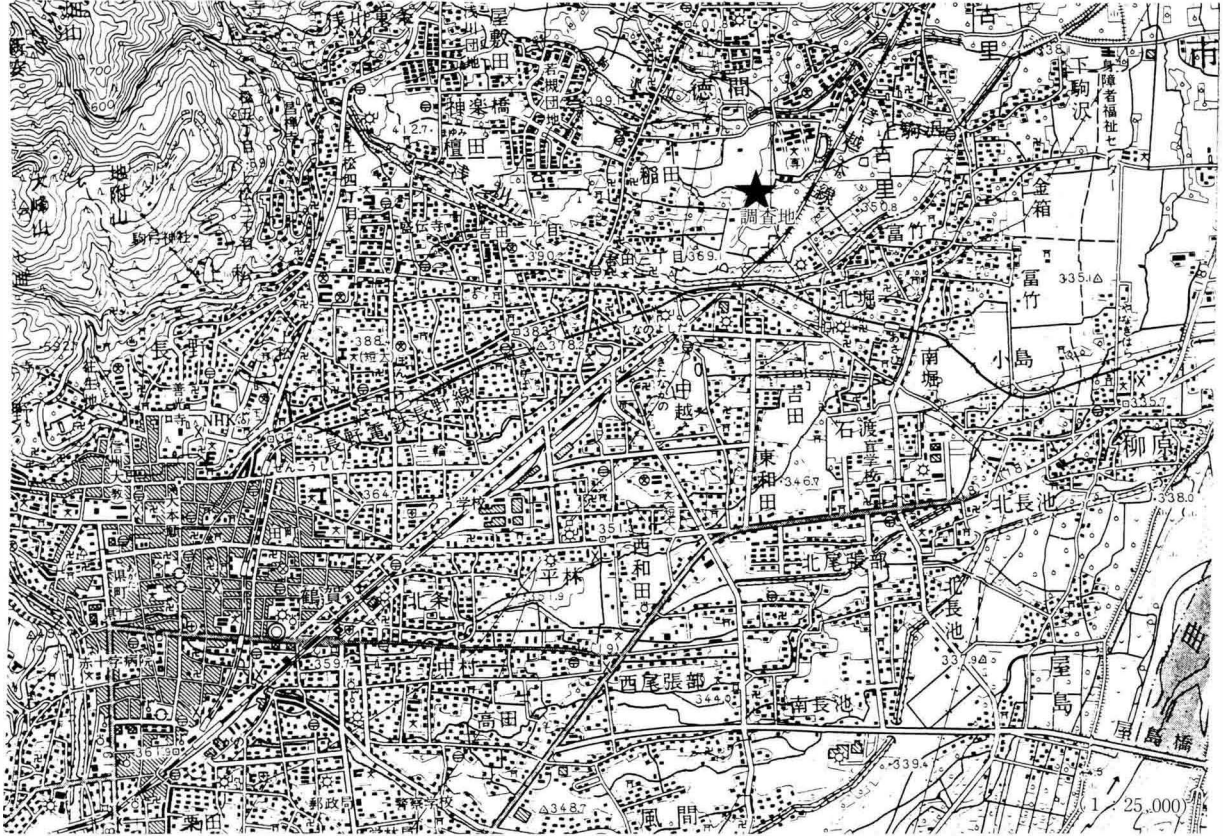


図1 調査地ならびに調査地周辺の地形

第2章 調査地周辺の考古学的環境

飯綱山を水源とする浅川は山間部を侵食流下した後、浅川東条地籍の通称浅川原口を谷口として盆地に流入し、東南方向を主軸とした平均斜度1/45を計測する典型的な扇状地を形成する。この扇状地上には多くの遺跡が存在し、長野市内でも有数の規模を誇る「浅川扇状地遺跡群」として把握されている。今回の調査地点も浅川扇状地扇央付近に位置し同遺跡群の周知の範囲内に位置する。以下浅川扇状地遺跡群の代表的な遺跡について概説し、周辺の考古学的環境としたい。

旧石器時代は、浅川源流に近い猫又池・大池に遺跡が確認されているが扇状地上にはその存在は確認されていない。

続く縄文時代には、湯谷・赤萱平・刈田・牟礼バイパスA地点・徳間榎木田・浅川端の各遺跡が確認されている。これらはともに駒沢川と、浅川流域に集中する傾向が認められ、正式調査を受けた遺跡としては前者に牟礼バイパスA地点遺跡、後者に浅川端遺跡がある。牟礼バイパスA地点遺跡では前期前葉の住居址1軒、浅川端遺跡では同じく前期前葉の住居址1軒、土坑1基が検出されている。

浅川扇状地の本格的な開発は次ぎの弥生時代から始まったものといえる。主要な遺跡には徳間小学校遺跡・牟礼バイパスD地点遺跡・神楽橋遺跡・浅川端遺跡・吉田高校グラウンド遺跡等がある。徳間小学校遺跡では中期終末の住居址2軒が検出されているが、近年周辺が土地区画整理事業に伴って調査され、同時期の集落が数箇所検出されている。牟礼バイパスD地点遺跡では中期栗林式期の住居址4軒・土坑1基・浅川端遺跡では同時期の住居址2軒・土器集積1が検出されているがともに従来不明瞭であった栗林式前葉のもので、良好な資料といえよう。吉田高校グラウンド遺跡は後期初頭吉田式土器の標識遺跡で、特に第3次調査では住居址10軒からなる当該期の単一集落が良好な状態で検出されている。浅川扇状地上にて検出された上記の諸遺跡はいずれも中期～後期初頭に限られ、後期後半の箱清水式期の遺跡はその存在が希薄であり、少なくとも現状では中期～後期初頭の大規模集落と箱清水式期の大規模集落とが分布上一致することはない。この状況が善光寺平の他の地域にもそのままあてはまるか否かは不明であるが、その背後には生産もしくは生活様式の差異といった根本的な要因が認められる可能性もあり今後の重要な検討課題である。

古墳時代に入り浅川扇状地を特徴付けるのは中期集落の展開であろう。有名な駒沢祭祀遺跡をはじめとして、近年牟礼バイパスB地点遺跡・下宇木遺跡など良好な集落遺跡の検出例が増えており、その集中度は善光寺平の中でも特異である。さらにこれらの諸遺跡では陶器編年I型式2段階～4段階に対応すると考えられる古手の須恵器が比較的集中して出土する傾向が顕著であり、この点も善光寺平の中では特徴的である。犀川以北の盟主的な古墳群である地附山古墳群の保有した多量の須恵器の存在を合わせ考えると、当該期における浅川扇状地の重要性がにわかにクローズアップされてこよう。

古墳時代後期～平安時代にかけては比較的継続して集落が展開する。浅川西条遺跡・牟礼バイパスB・C・D地点、三輪遺跡などが代表的な遺跡といえよう。ただし大規模集落が長期間にわたって同一箇所に存在するのではなく、時期ごとに立地を異にしつつ中核的な集落が形成されている可能性が高い。

また平安時代末期にはこの地域に信濃28牧のうちの吉田牧が設けられており、駒弓・桐原牧神社や駒沢などはその名残と考えられ、広大な扇状地は好適な放牧地であったと考えられる。

中世にはこの地域は若槻庄の領域となり、若槻里城をはじめ本堀・押鐘・桐原・相ノ木・平林・和田などの城館址が存在する。



1. 調査地 2. 水内坐一元神社遺跡 3. 小島境遺跡 4. 南川向遺跡 5. 牟礼バイパスD地点遺跡
- 6~8. 牟礼バイパスA~C地点遺跡 9. 迎田遺跡 10. 浅川西条遺跡 11. 神楽橋遺跡 12. 檀田遺跡 13. 柳田遺跡 14. 二ツ宮遺跡
15. 三才田子遺跡 16. 駒沢祭祀遺跡 17. 駒沢新町遺跡 18. 上駒沢遺跡 19. 湯谷古墳群 20. 浅川端遺跡 21. 押鐘遺跡
22. 吉田高校グラウンド遺跡 23. 下宇木遺跡 24~26. 三輪遺跡 27. 国鉄貨物基地遺跡 28. 箱清水遺跡 29. 地附山前方後円墳
30. 上池ノ平古墳群 31. 南向塚古墳 32. 吉古墳群 33. 本村東沖遺跡 34. 新諏訪町遺跡 35. 県町遺跡 36. 平柴平遺跡

図2 調査地周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)

第3章 調査

1 調査概要

ニツ宮遺跡A区

調査地一帯は、新田川に沿って発達した台地状の地形を呈し、地表面での遺物散布が多数確認されることから、集落遺跡の存在が予想される地域であった。

市指定文化財である稲積一里塚の近隣に当たるところから、古代東山道の支道沿いに発達した奈良・平安時代の集落の存在を予想していたが、調査の結果は遺構の年代が示すとおり、弥生時代集落遺跡を検出するに至っている。

調査範囲は幅が15m前後ながら長さは130mを越え、台地縁辺を斜めに横断する形となったため、台地上に営まれた該期集落の北半部を検出することができたものといえる。集落構造は台地の中央部に住居が集中し、その外延に貯蔵穴と思われる土坑群が配置されている。さらにその外側をいくつかの溝によって区画し、居住域を限定している状態が観察される。発掘調査によって集落構造が明確となった遺跡は県内でも希少であり、今回の調査により得られた成果には注目されるべきものがある。

ニツ宮遺跡B区

A区から低地帯を挟んで50mほど西側に位置する。溝址3本と竪穴状遺構1基を検出している。いずれも時期的には古墳時代中期に位置付けられる。特に一号溝址はその中央より埋葬主体の一部と考えられる土坑を含み既に墳丘部を削平された小規模円墳の可能性がある。しかし今回の調査にては確実に古墳として把握しうるか明らかにし得なかった。

本堀遺跡

平安時代の住居址1軒、土坑3基、溝1本、縄文時代の土坑1基を検出している。1号住居址は柱穴カマド等検出されておらず、住居址と判断する根拠は乏しい。覆土内より平安期の土師器と図3に示した軒平瓦破片が出土している。また4号土坑は深さ1.20m程で内部に小ピットを数個有し、縄文式土器の小破片を若干出土している。縄文期の落とし穴遺構の可能性が高く注目される。

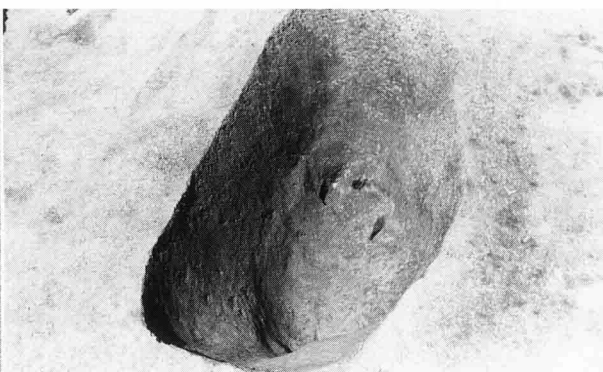


図3 軒平瓦拓影

以上各調査区の概要を述べた。以下本書では紙数の都合から比較的まとまった遺構遺物を出土しているニツ宮遺跡A区の調査を中心に記述を進める。



本堀遺跡 1号住居址



本堀遺跡 4号土坑

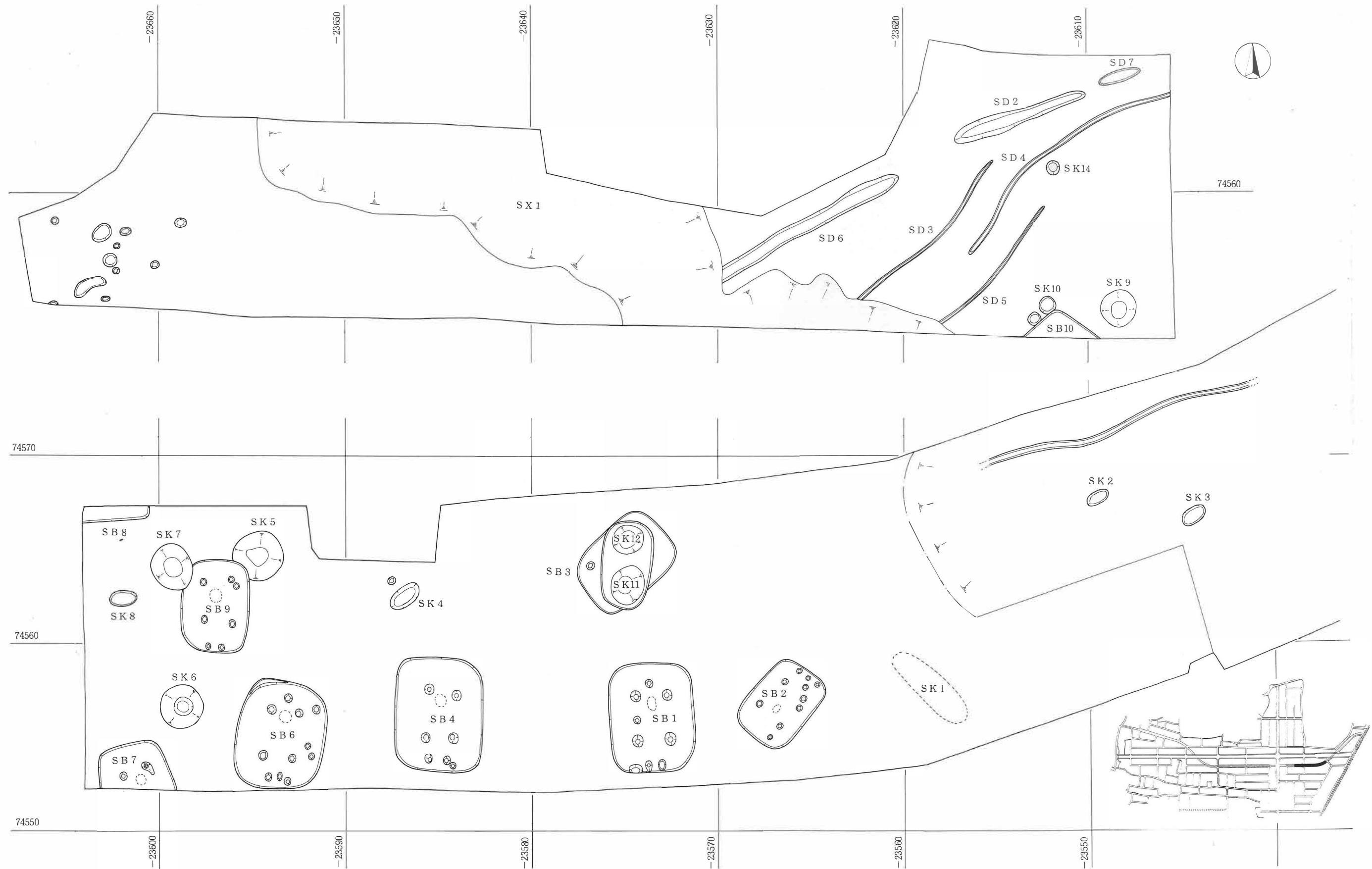


図4 ニツ宮遺跡 A区 調査区全測図 (1:200)

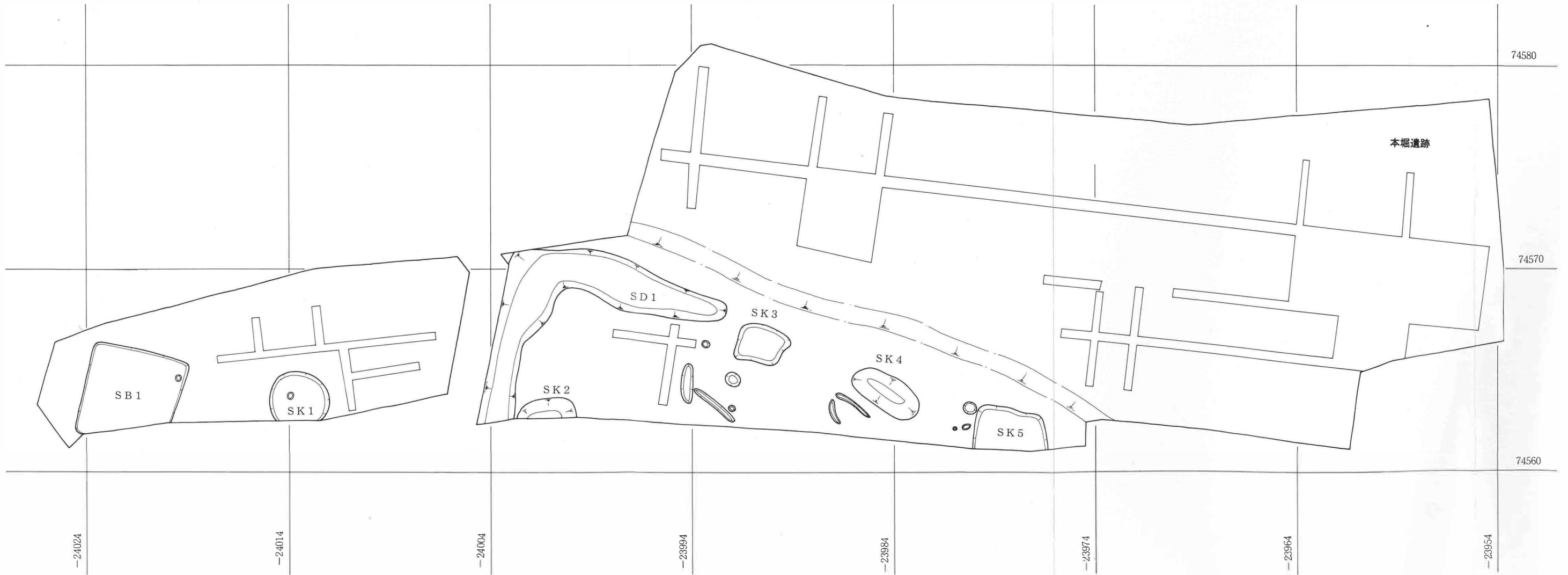
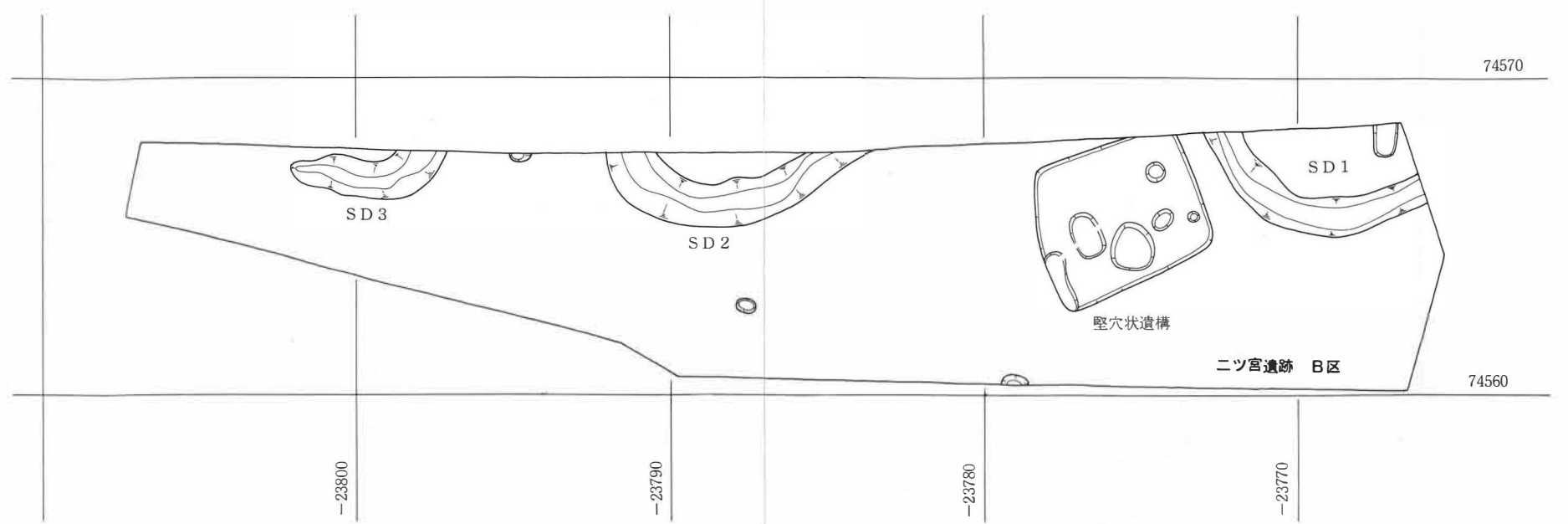
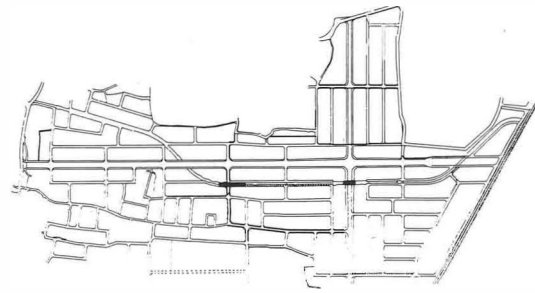


図5 ニツ宮遺跡 B区・本堀遺跡調査区全測図 (1:200)

2 遺構・遺物

A区1号住居址

主軸をほぼ南北方向にとり、平面プランは5,70×4,60mの隅丸長方形住居址である。支柱穴はP1～P4で、その配列は短辺1,60～1,70m、長辺2,50mの長方形配列である。支柱穴には奥壁側の中心軸上に位置するP5と、南側に二本一対となるP7とP8が存在する。P7・P8間は0,90mを測る。その西側に位置するP6は、P7・P8と共に出入口施設と関連させる考えもあるが性格は不明である。炉は奥壁側柱穴間中央やや内側に位置し、50×40cmほどの長楕円形を呈し、深さは5cmである。底面は加熱を受けて焼土塊が形成されている。

床面上ならびに柱穴内に落ち込んだ状況で比較的少量の土器が出土している。

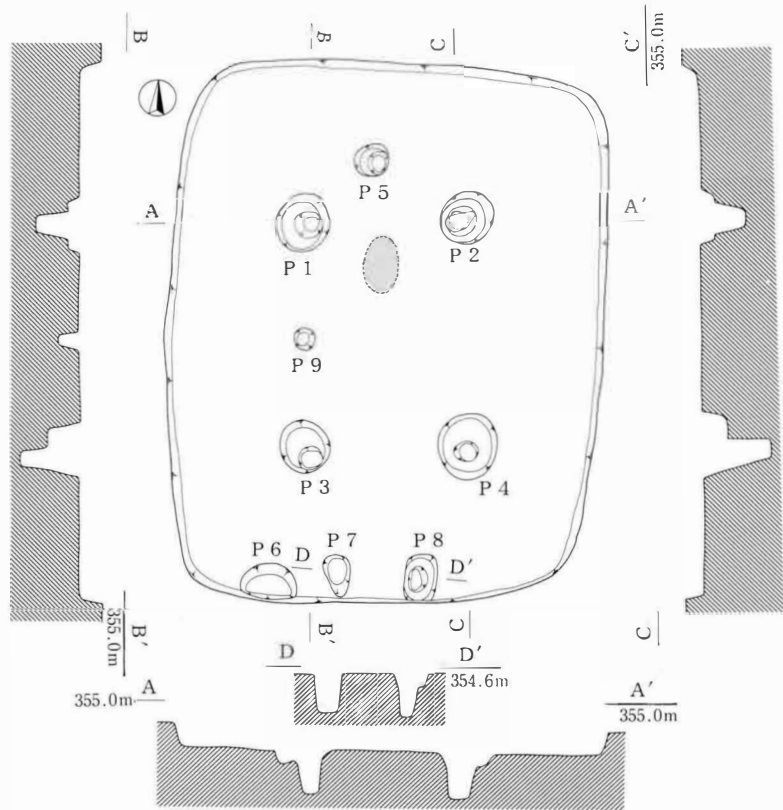


図6 A区1号住居址実測図(1:80)



A区1号住居址

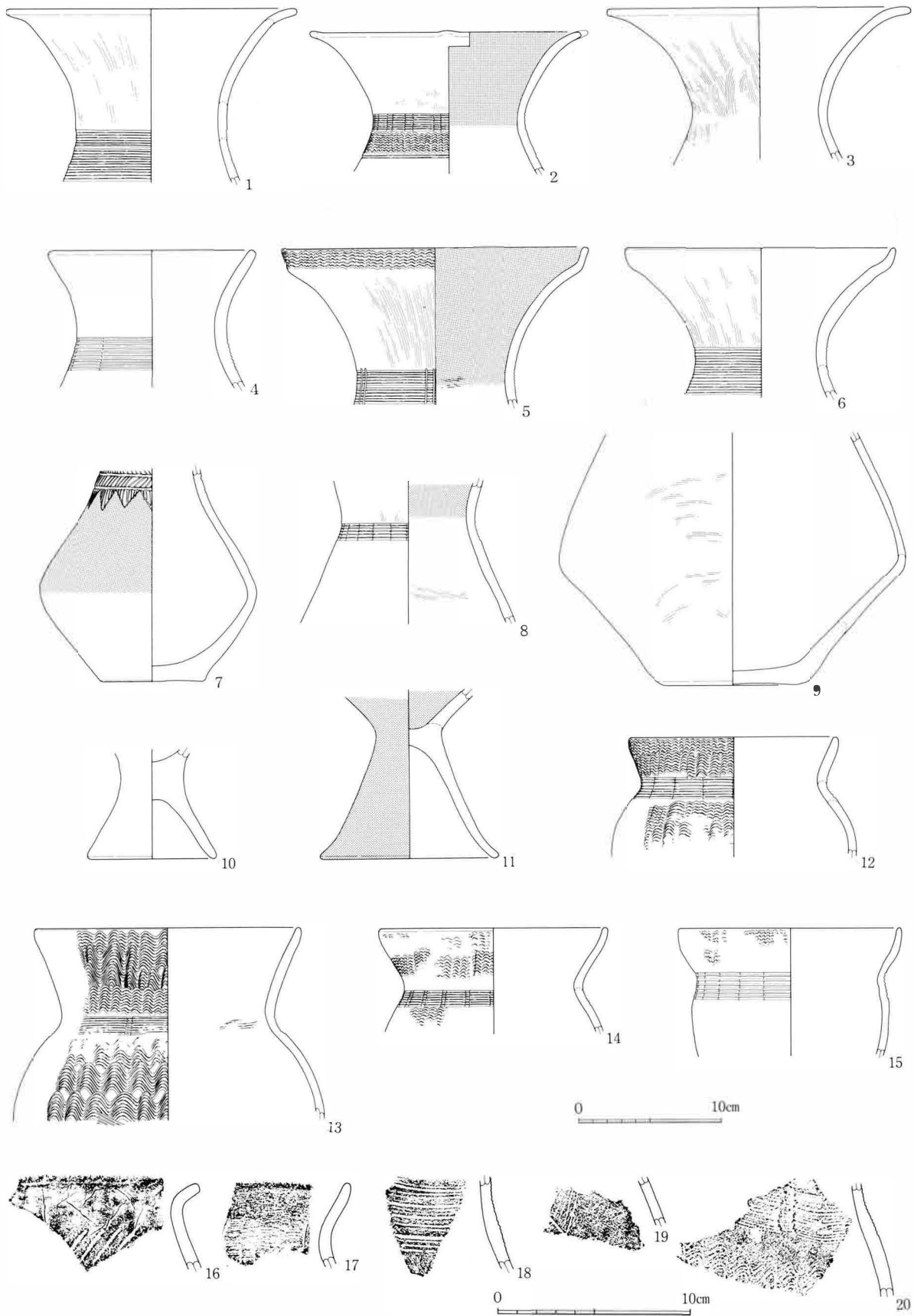
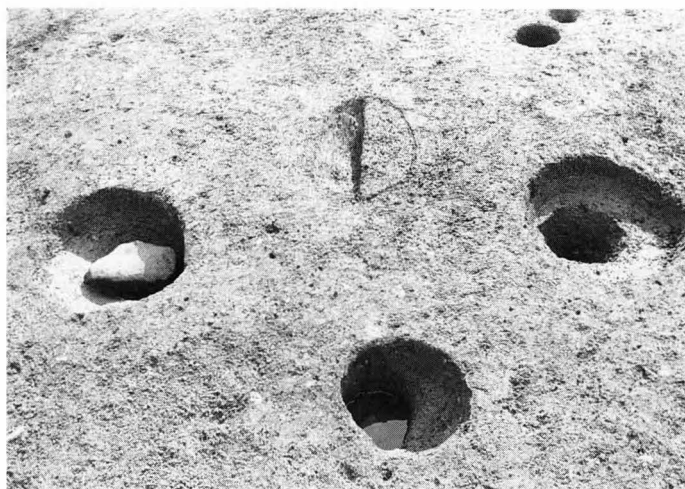


図7 A区1号住居址出土土器実測図ならびに拓影



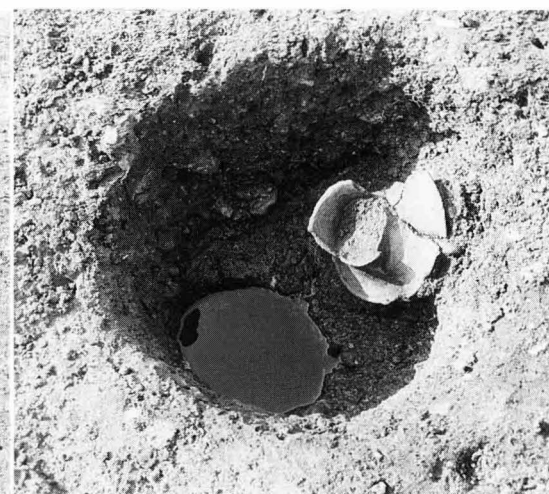
炉・奥壁側柱穴



土器出土状況



南側柱穴



柱穴内土器出土状況



NO1



NO2



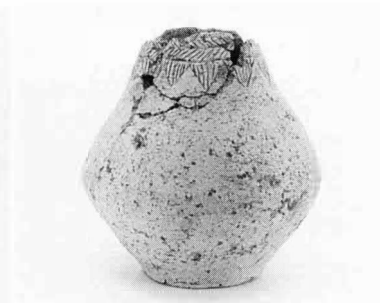
NO3



NO5



NO6



NO7

A区2号住居址

主軸はN-139°-Wで、1区で検出された住居の中では本住居址のみ大きく主軸方位を異にする（3号住居址もその可能性がある）。平面プランは4,50×3,10mのやや不整な隅丸長方形を呈する。主柱穴はP1～P4で柱穴配列は、短辺1,40～1,60m、長辺1,80～1,90mの不整な長方形配列である。支柱穴は北側の二本一対となるP5・P6が存在するが反対側の中心軸上のもは確認されていない。P7は1号住のP6と同様のものと考えられる。床面は軟弱で、住居址自体が一部礫層中に掘り込まれているため、凹凸の激しい状況にある。炉は奥壁側柱穴間中央やや内側よりに位置し、径30cmほどの地床炉である。床面より若干浮いた状況で、土器が数点出土している。

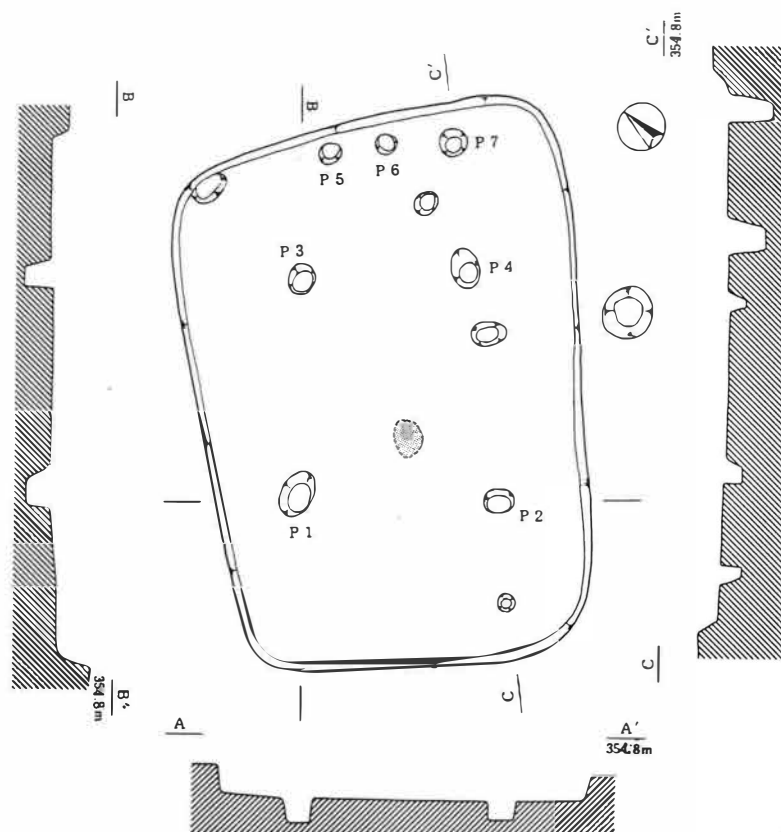


図8 A区2号住居址実測図（1：60）



A区2号住居址

A区3号住居址

11号・12号土坑を切って構築されるが、検出状況の不明瞭さから土坑の調査を先行してしまい、詳細は不明な部分が多い。

主軸は2号住居址とほぼ同一で、他の住居址群とはその方位を異にする可能性が高い。平面プランは4,60×3,60mほどの隅丸長方形住居址である。検出された柱穴はP1のみであるが、主柱穴の一つと考えられ、主柱穴配列は4本長方形が予想される。確認面からの掘り込みは平均20cm程である。覆土内より壺(1)甕(2・3)、高坏(4)が出土している。

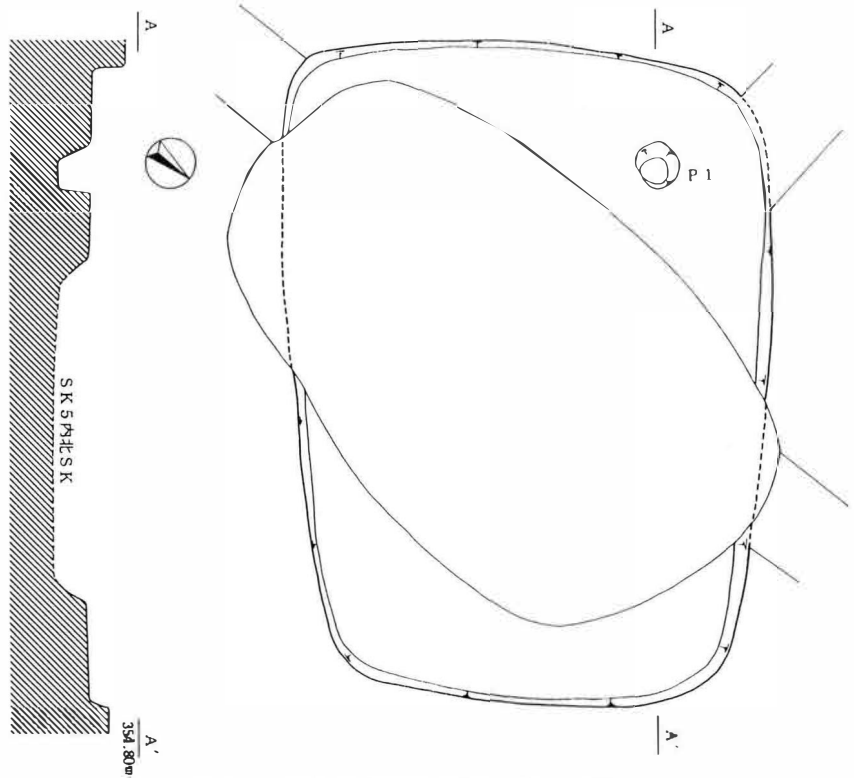


図9 A区3号住居址実測図(1:60)



A区3号住居址

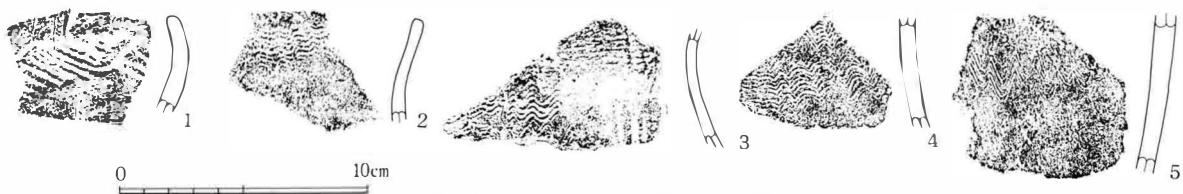


図10 A区3号住居址出土土器拓影

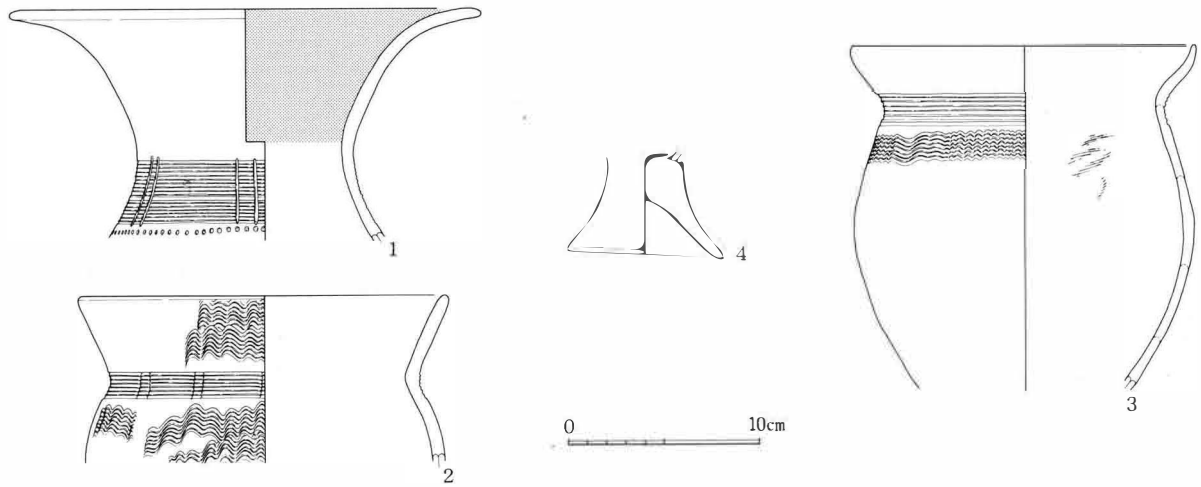
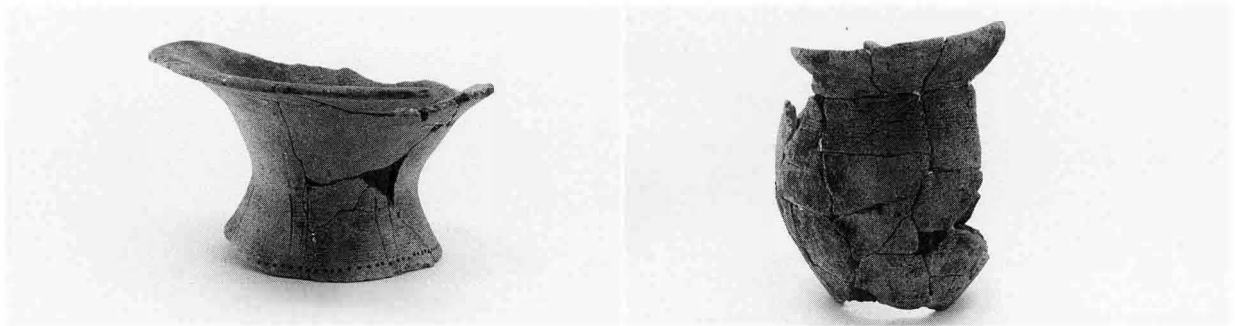


図11 A区3号住居址出土土器実測図（1：4）



NO. 1

NO. 3

A区4号住居址

主軸をほぼ南北方向にとる住居址で、平面プランは5.60×4.50mほどの隅丸長方形住居址である。支柱穴はP1～P4で、柱穴配列は短辺1.40m、長辺2.30～2.40mの長方形配列である。支柱穴は住居址南側の壁際に、二本一對のP5・P6が検出されており、さらにその東側にP7が存在する。炉は奥壁側柱穴間中央やや内側のところに位置する。径50cmほどの地床炉で、深さは5cm程である。底面は加熱を受けて焼土塊が形成されている。出土土器には壺(1)、甕(2・3)、蓋(4)、高坏(5)があり、床面上や柱穴内に落ち込んだ状態で出土している。

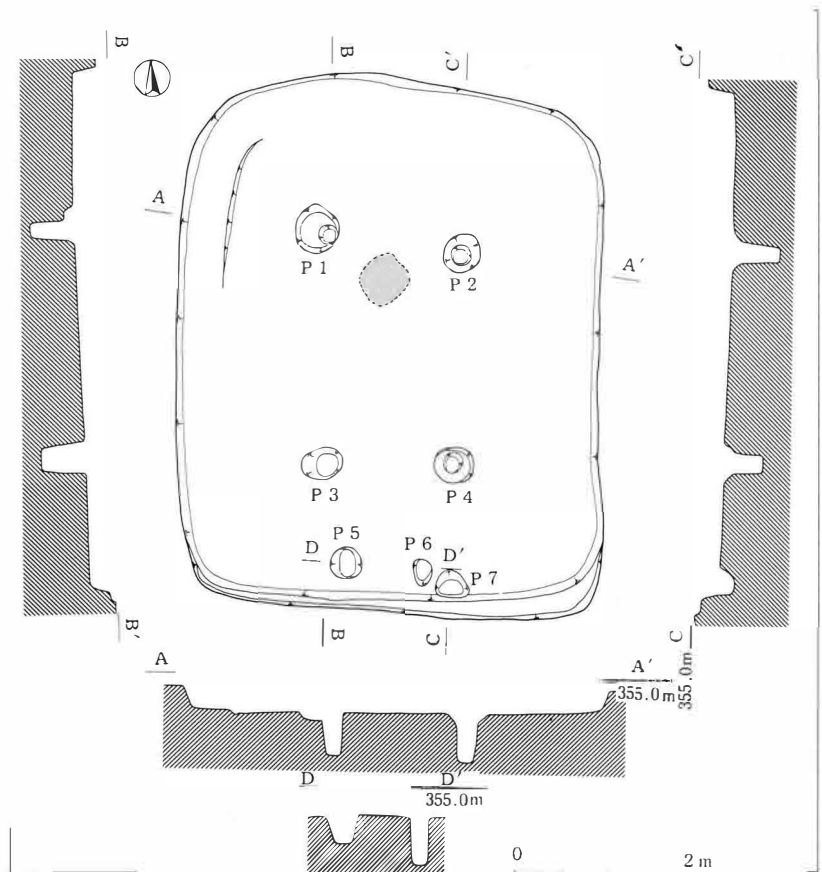
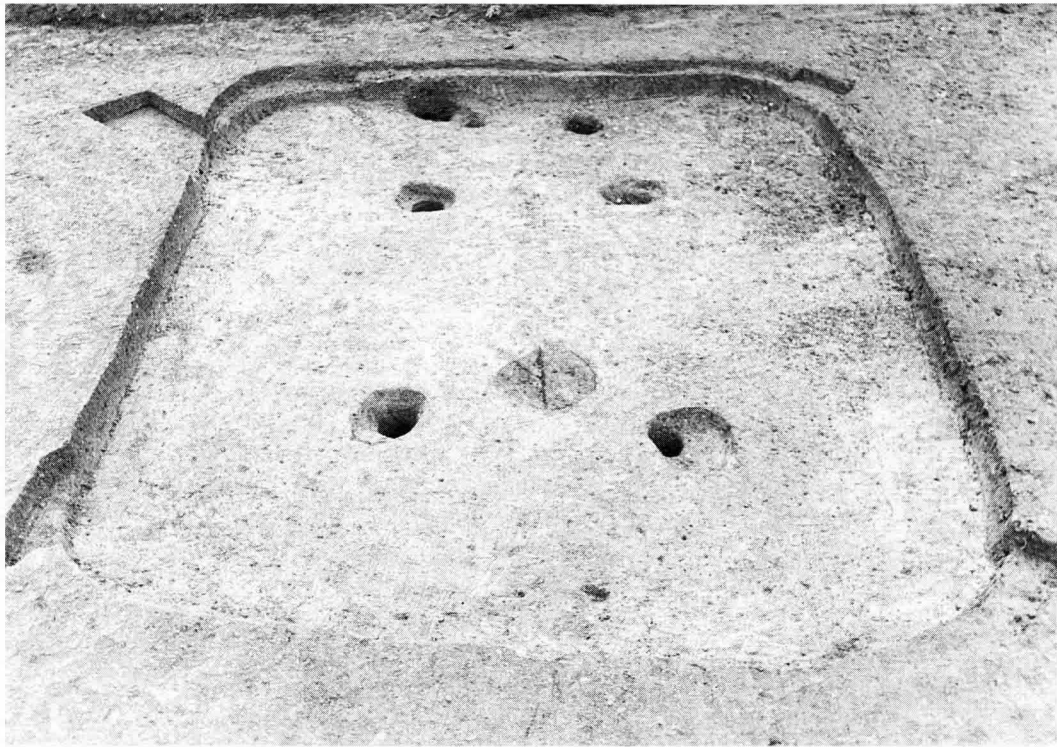
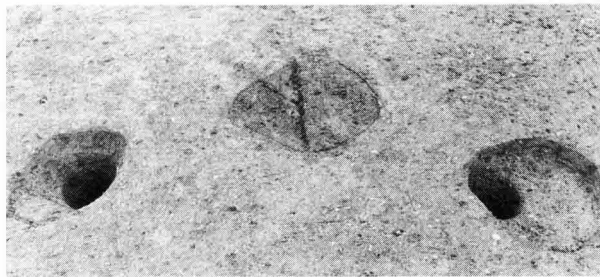


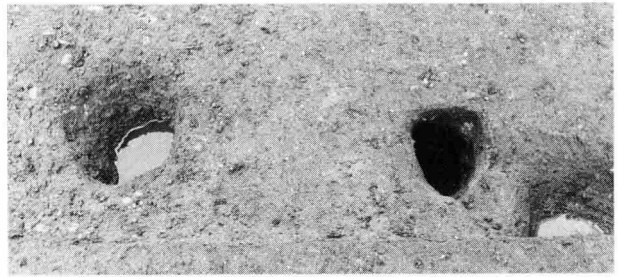
図12 A区4号住居址実測図（1：80）



A区 4号住居址



炉・奥壁側柱穴



入口部施設

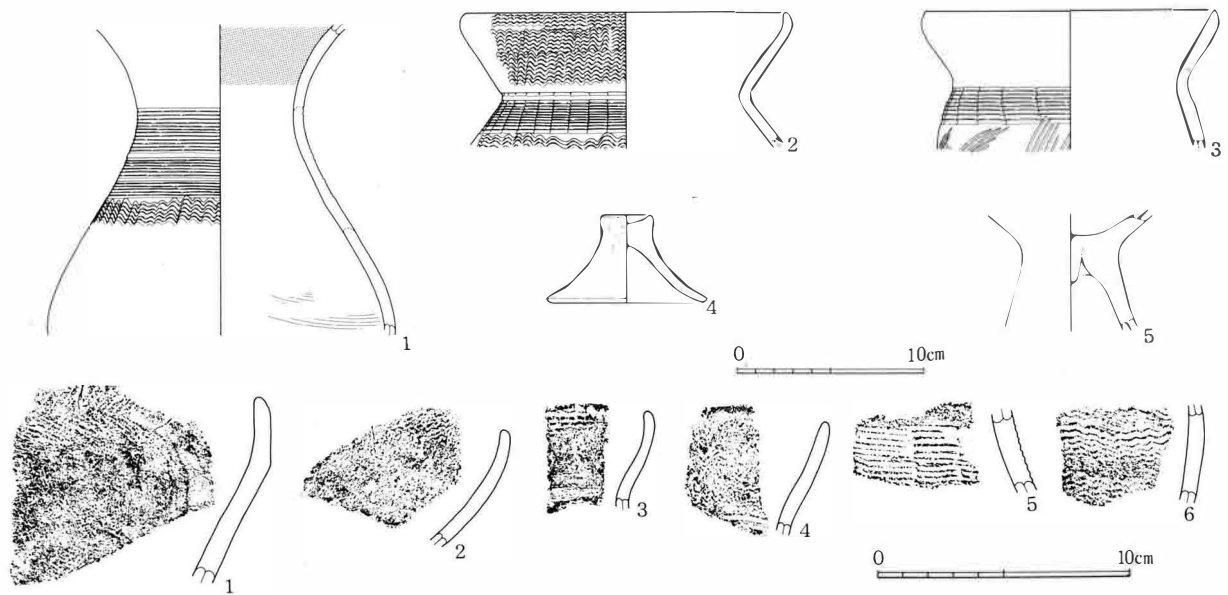


図13 A区4号住居址出土土器実測図ならびに拓影

A区6号住居址

主軸をほぼ南北方向にとる住居で、平面プランは5,80m×4,80mのやや不整な隅丸長方形住居址である。支柱穴はP1～P4で、柱穴配列は短辺1,40～1,70m、長辺2,50～2,70mの長方形配列である。支柱穴には奥壁側の中心軸上に位置するP5と、南側に二本一対となるP6・P7が存在する。またその東側にP8が存在する。東側壁際に位置するP9・P10も支柱穴となる可能性が高い。炉は奥壁側柱穴間中央やや内側に位置し、径40cmほどの地床炉で、深さは5cmほどである。住居址北西隅の部分が一登高くなりテラス状を呈する。床面上から比較的多くの土器が出土しているが、9号住居址との接合関係をもつものも存在し注目される。

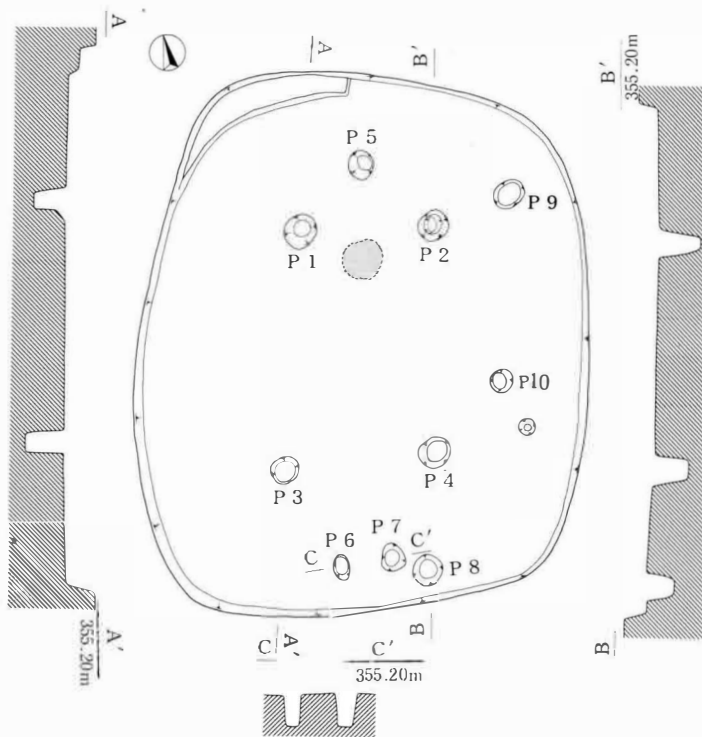


図14 A区6号住居址実測図（1：80）



A区6号住居址

图16 A区6号居住址出土器拓影①

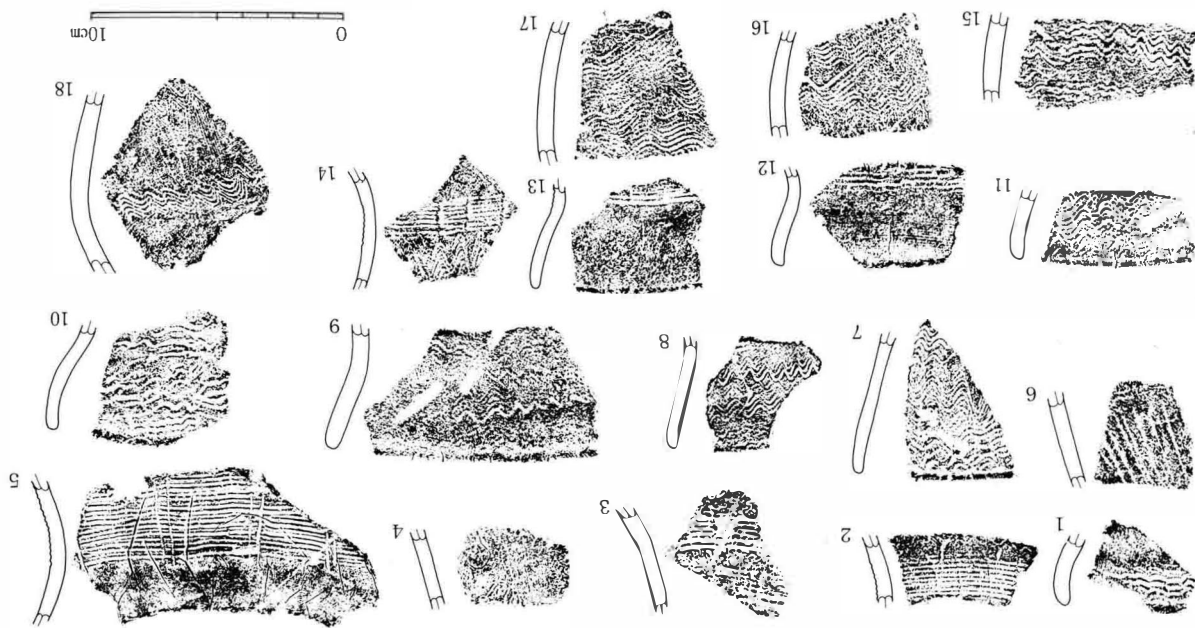
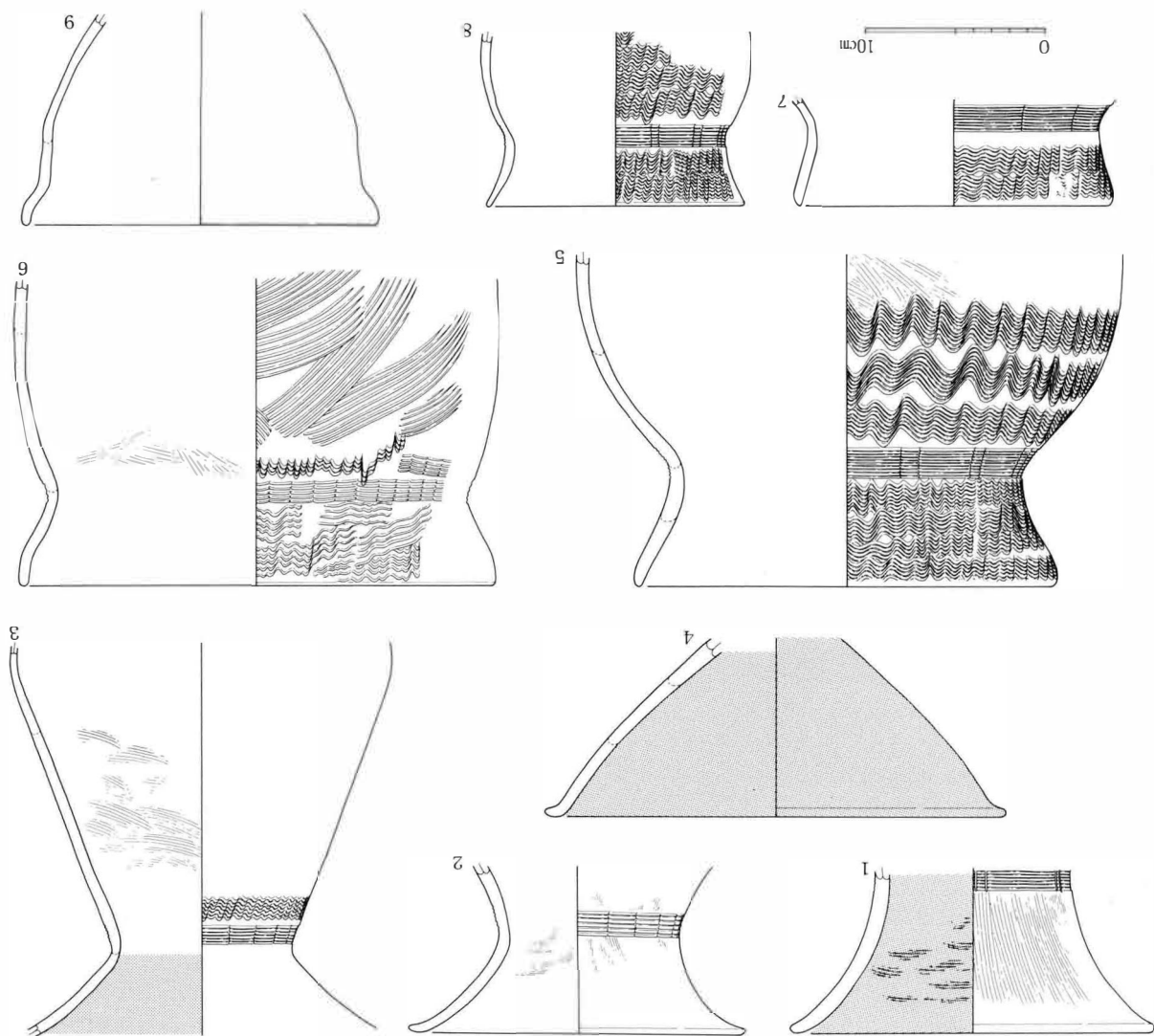


图15 A区6号居住址出土器美测图



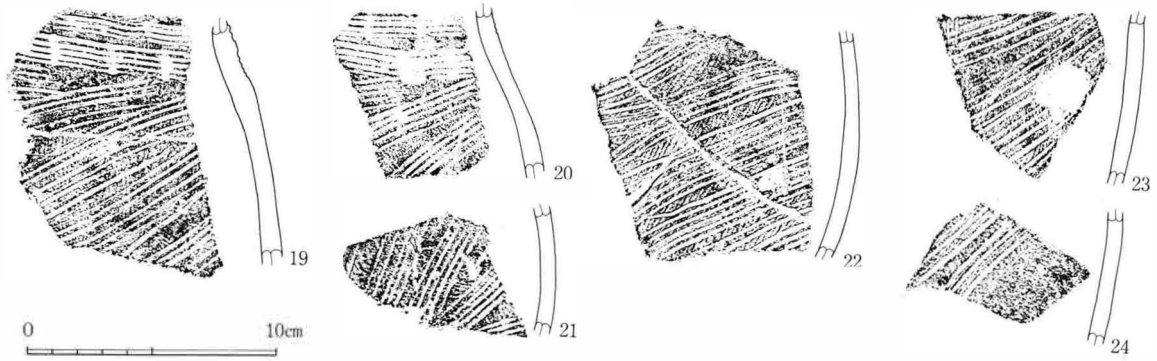


図17 A区6号住居址出土土器拓影②



NO. 1

NO. 2

NO. 5

A区7号住居址

住居址南側は、約1/2が調査区外となる。主軸をほぼ南北方向にとる住居址で、平面プランは短辺約4,20mのやや不整な隅丸長方形住居址と考えられる。主柱穴はP1・P2が検出されている。柱穴配列は4本長方形であろう。P1・P2間の距離は1,20mである。炉はP1・P2間中央やや内側のところに位置する。径50cmほどの地床炉で、深さは5cm程である。確認面からの掘り込みは平均20cmほどで、床面も比較的しまっていた。床面付近より壺(1)と甕(2)が出土している。

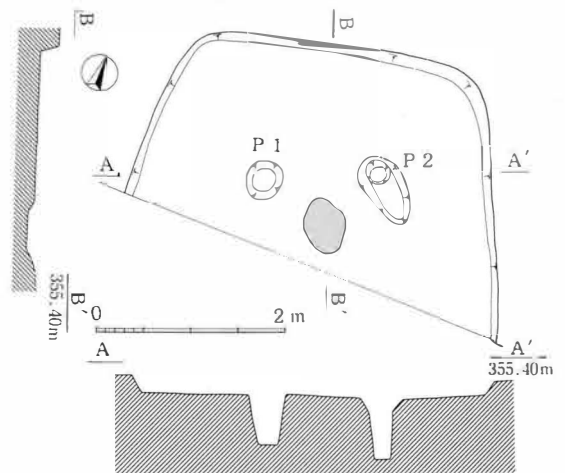


図18 A区7号住居址実測図(1:80)

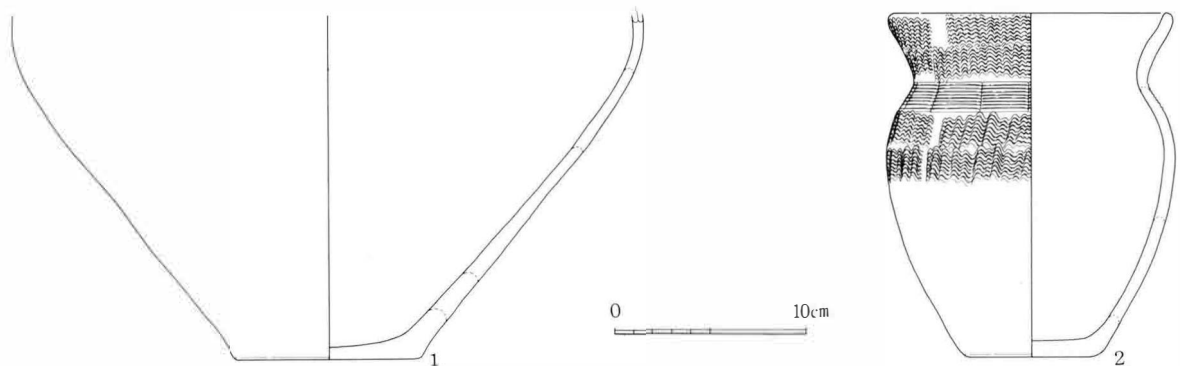


図19 A区7号住居址出土土器実測図(1:4)

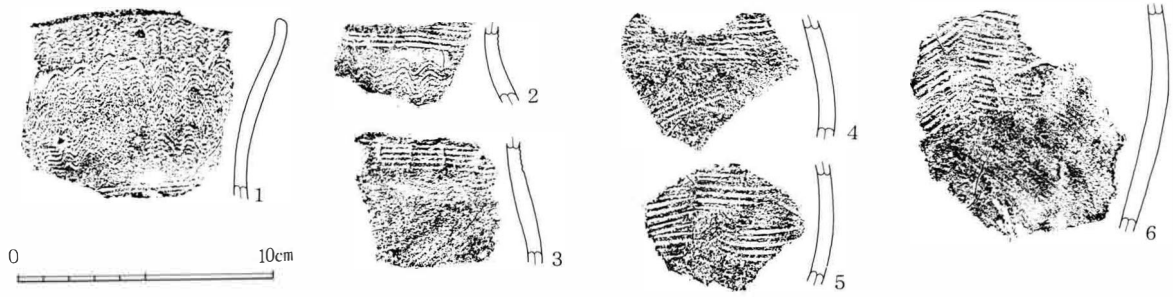
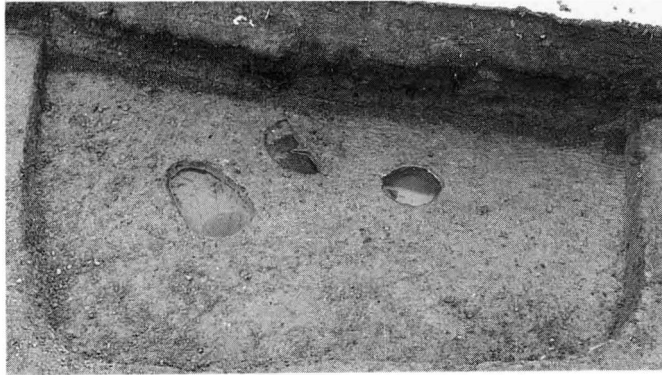


図20 A区7号住居址出土土器拓影



A区7号住居址



NO. 2

A区9号住居址

5号・7号土壇を切って構築された住居址で、主軸はほぼ南北方向にとる。平面プランは4,90×3,60mのやや不整な隅丸長方形住居址である。主柱穴はP1～P4で、柱穴配列は短辺1,60m、長編2,00mの長方形配列である。支柱穴は住居址南側壁際に位置する、二本一對のP5・P6が存在する。炉は奥壁側柱穴間中央やや内側に位置し、径60cmほどの地床炉である。深さは約5cmほどである。

覆土内より甕（1・2）が出土している。

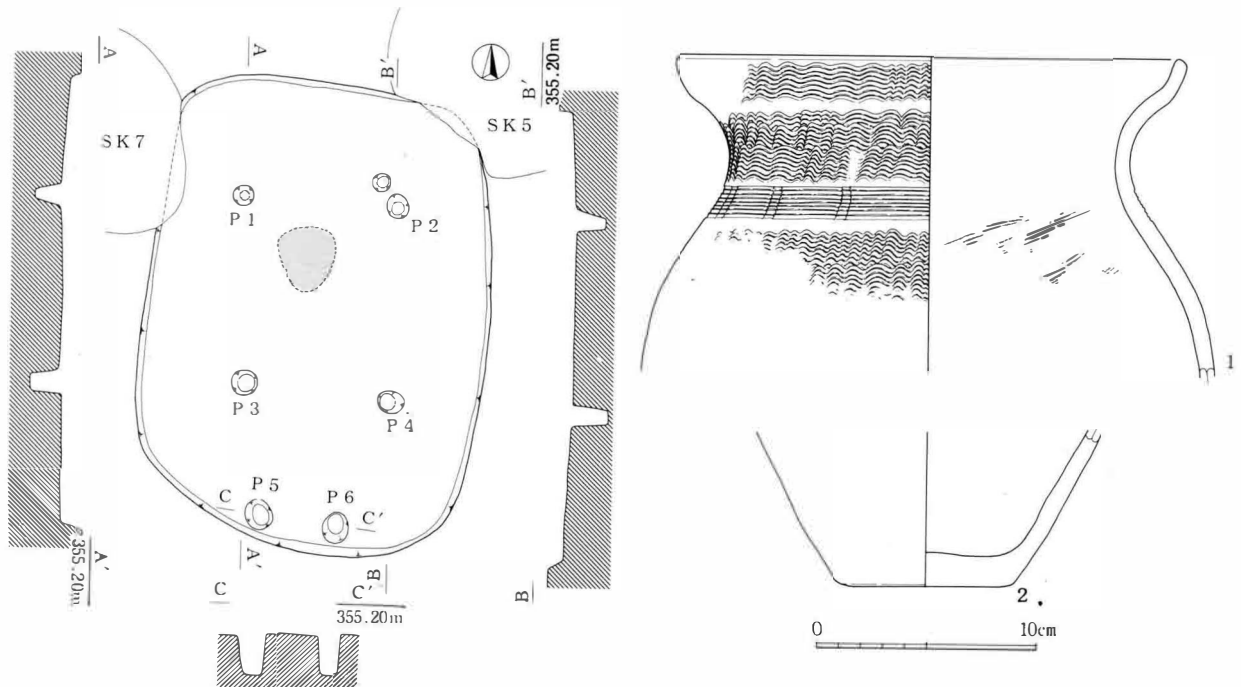


図21 A区9号住居址実測図（1：80）ならびに出土土器実測図

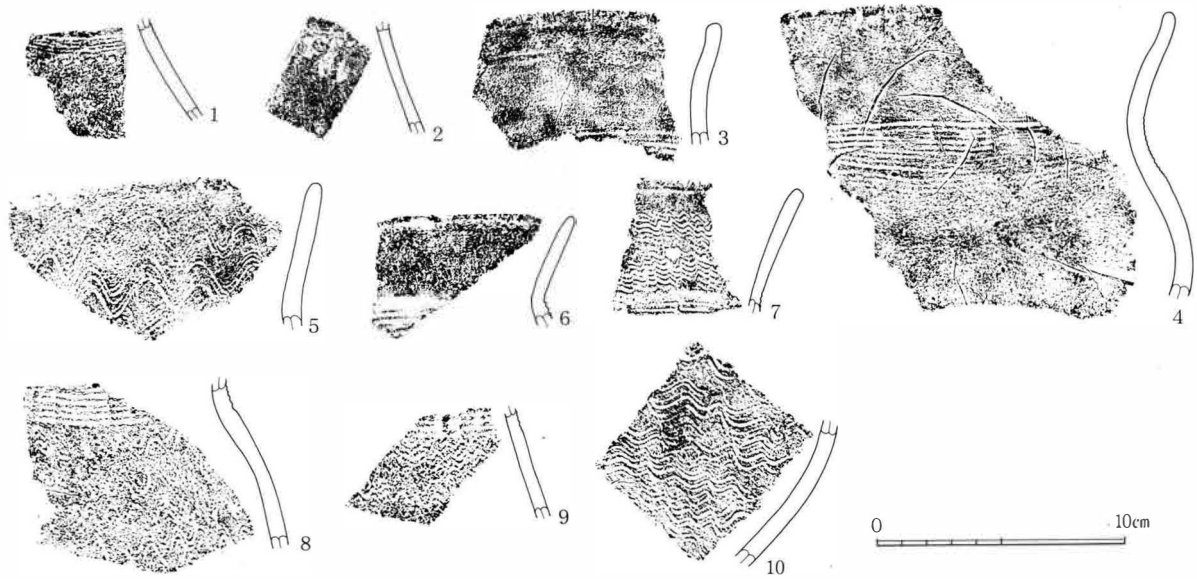


図22 A区9号住居址出土土器拓影



A区9号住居址

A区10号住居址

大半が調査区外となり、約1/4程を検出したのみで、詳細は不明な部分が多い。10号土坑をきって構築される。平面プランは短辺約3,80mほどの隅丸長方形住居址と考えられる。柱穴等は確認されていない。住居址西側の壁際に、幅15cm、深さ5cm程の壁周溝がめぐるが全周はしていない。住居址中央部分に焼土ならびに炭化物の堆積が確認されているが、主炉となるか詳細は不明である。覆土内より壺（1）と高坏（2）が出土している。

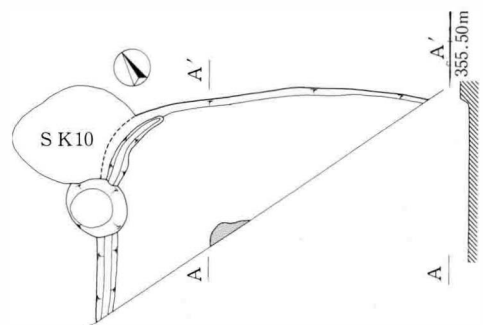


図23 A区10号住居址実測図（1：80）

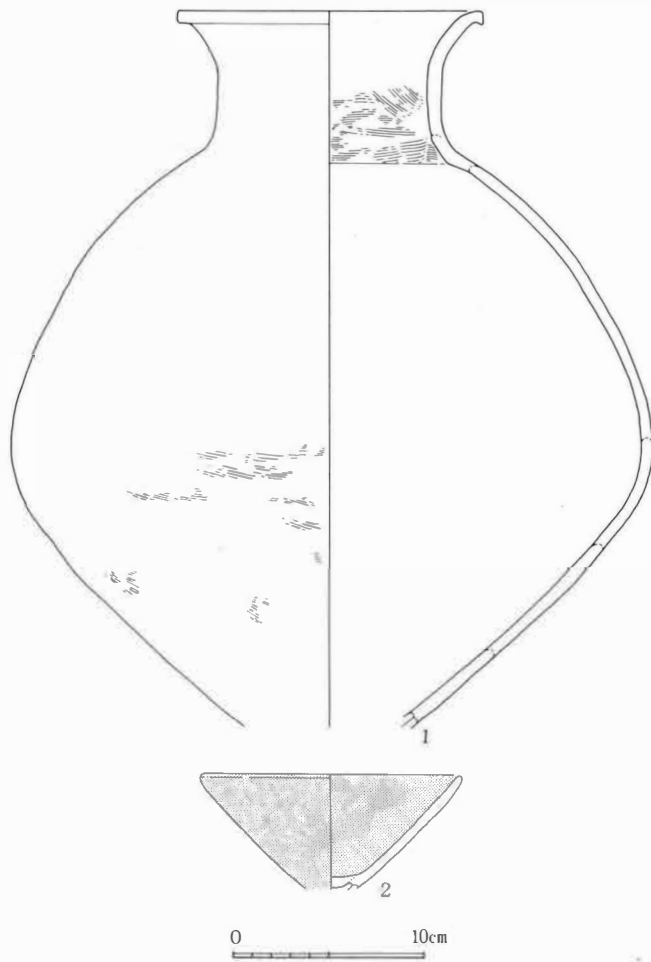
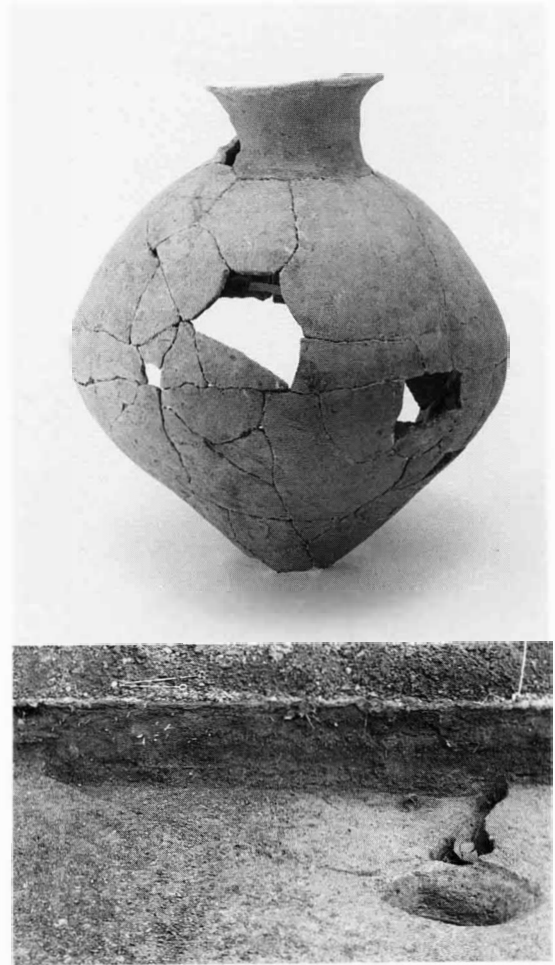


图24 A区10号住居址出土土器实测图



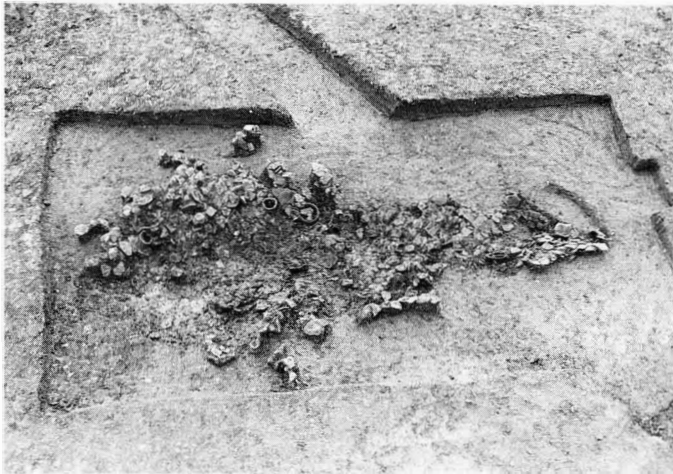
A区 10号住居址



A区 1号土坑土器出土状况

A区1号土坑

長さ3,60m、確認面での幅0,70~1,30mほどの溝状の落ち込みで、深さは平均30cmほどである。内部ならびに土坑周辺より、いずれも若干浮いた状況でかなり多量の土器が出土している。出土土器は小破片がその主体を占め、一括投棄されたような状況を呈している。壺(1~4)、甕(5~7)、無頸壺(8)などが出土しているが、いずれも弥生中期栗林式期の終末段階に位置するものである。



A区1号土坑

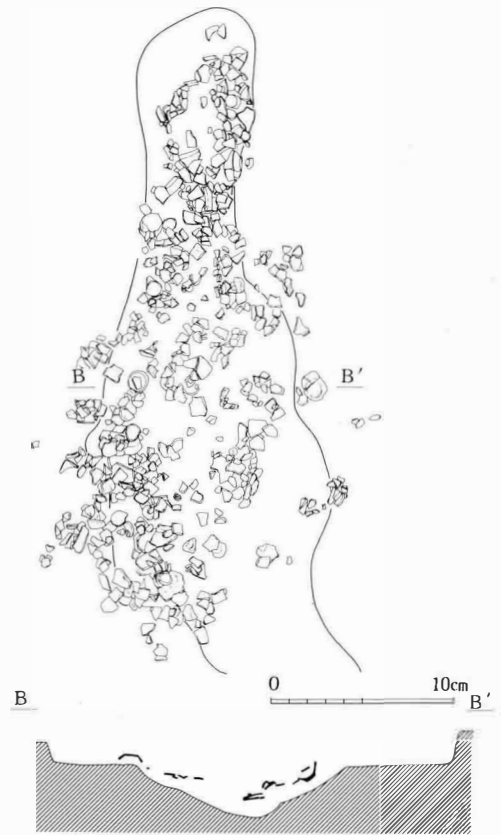


図25 A区1号土坑土器出土状況実測図

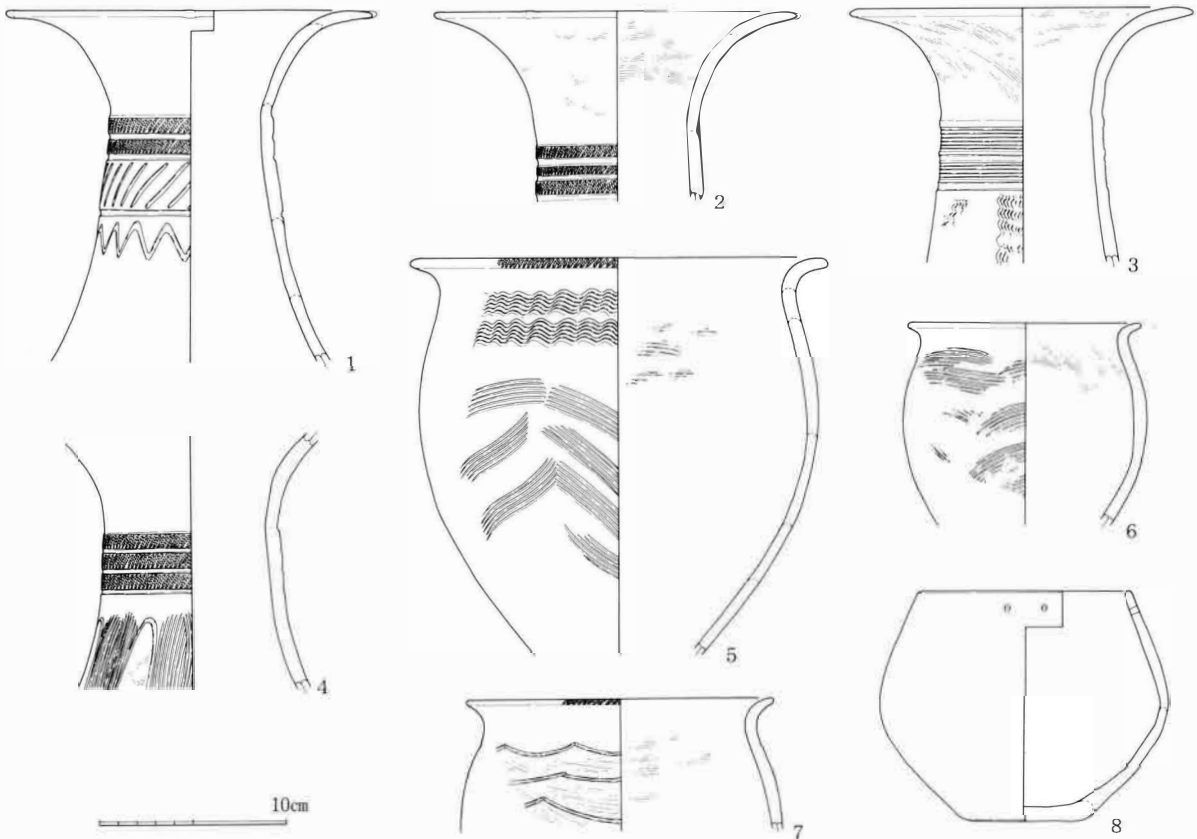


図26 A区1号土坑出土土器実測図

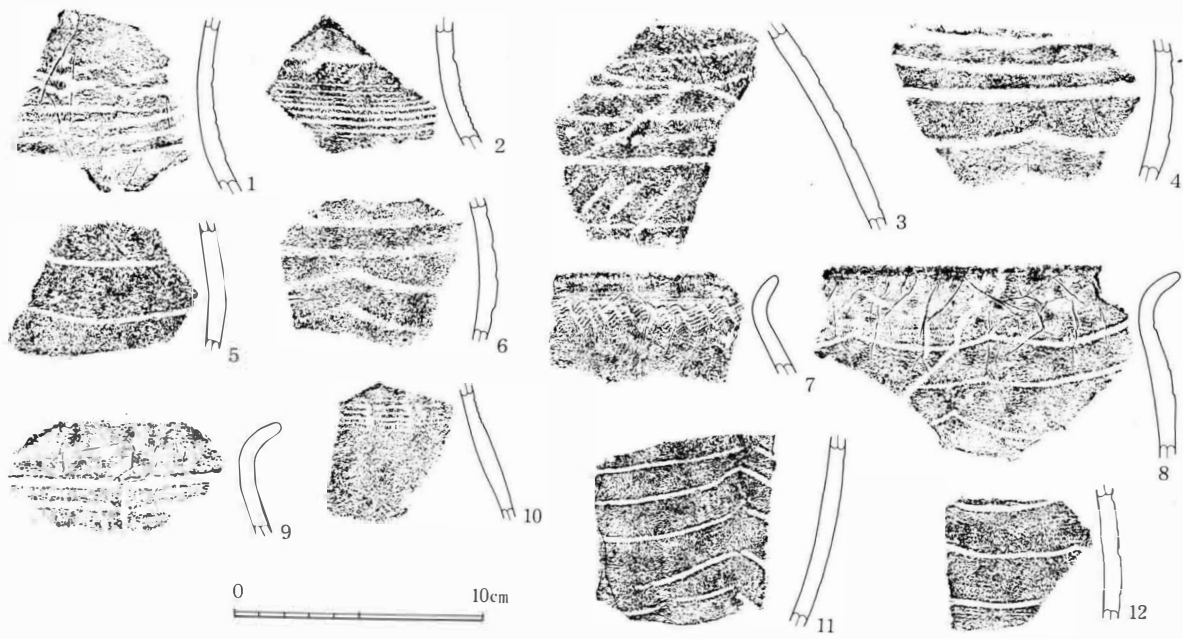


图27 A区1号土坑出土土器拓影



A区1号土坑出土土器



A区5号土坑

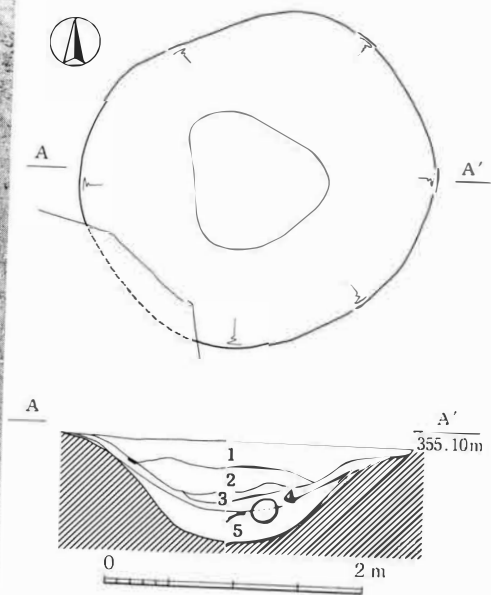


图28 A区5号土坑实测图 (1:60)

A区5号土坑

径2,80mほどのやや不整な円形の土坑で、深さは80cm程である。上層を一部9号住居址に切られる。覆土は5層に分層され、第1層は黒褐色砂礫質粘土層、第2層は中小礫・遺物・炭化物を含む黒色砂層、第3層は黒色有機質砂層、第4・5層は灰褐色砂質粘土層である。第5層上半を中心比較的少量の土器が出土している。

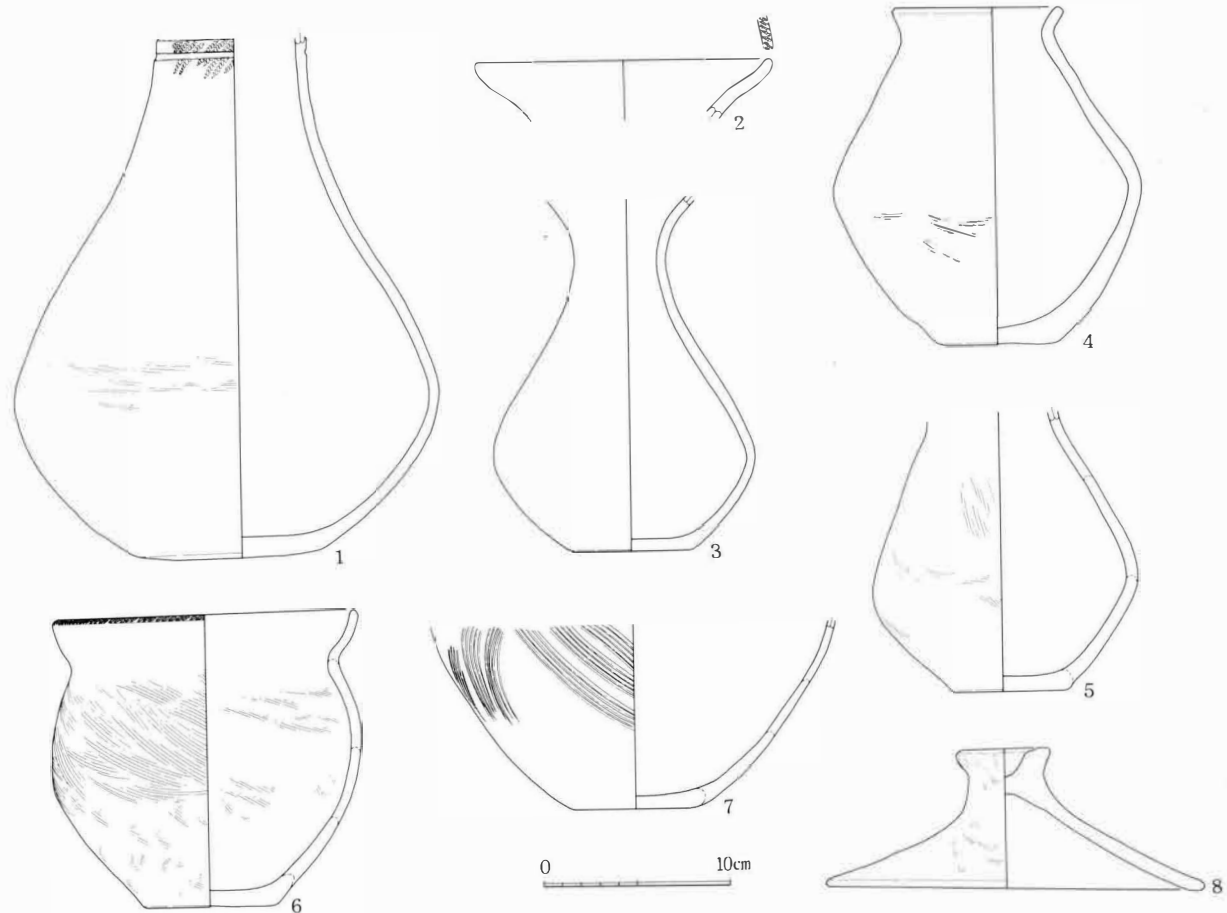
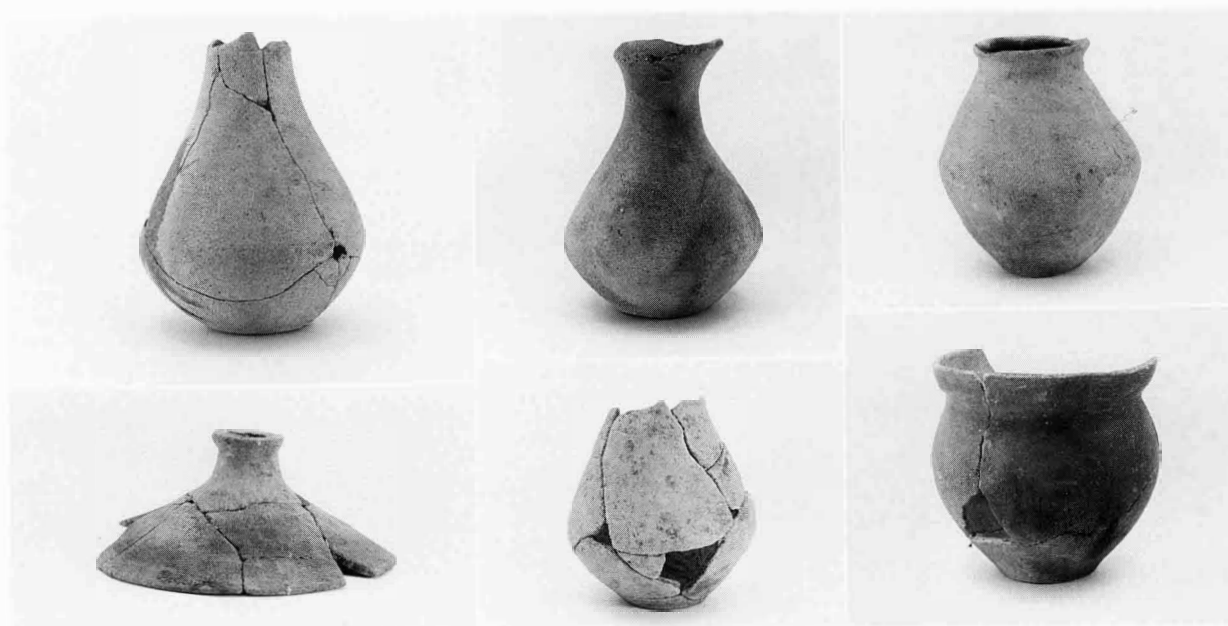


図29 A区5号土坑出土土器実測図



A区5号土坑出土土器

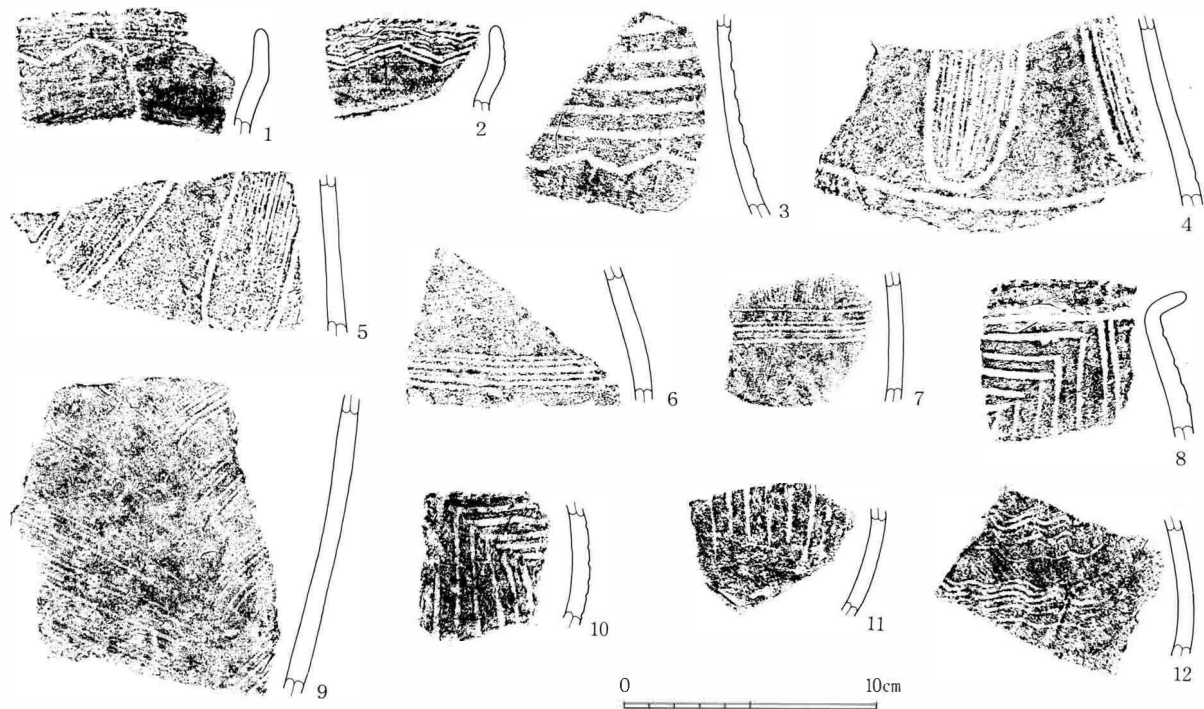


図30 A区5号土坑出土土器拓影

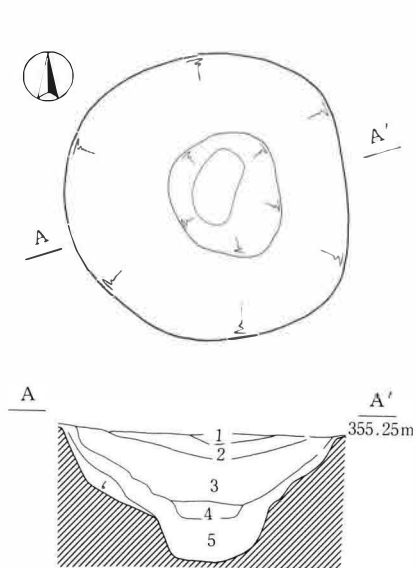


図31 A区6号土坑実測図 (1:60)

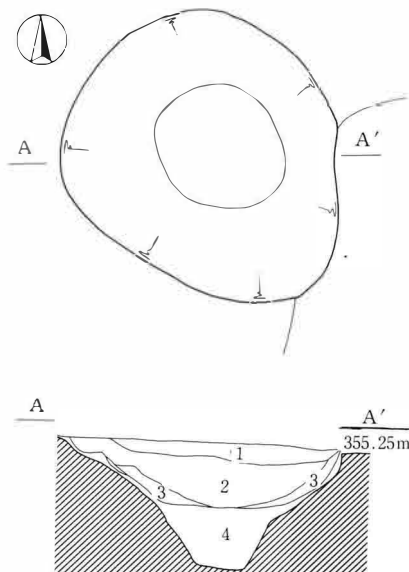


図32 A区7号土坑実測図 (1:60)

A区6号土坑

径2,20mほどのやや不整な円形を呈する土坑で、二段にわたる掘り込みを有し、深さは1,00m程である。覆土は6層に分かれ、第1層は赤褐色砂質粘土、第2層は黒色砂礫質土、第3～5層は灰褐色砂質土、第6層は暗褐色砂質土である。

A区7号土坑

径2,40mほどのやや不整な円形を呈する土坑で、深さは1,00m程である。上層は9号住居址に切られる。覆土は4層に分かれ、第1層は黒褐色砂礫質粘土、第2層は黒色砂質土、第3層は灰褐色砂質粘土、第4層は黒褐色砂質粘土である。第4層中より多量の土器が出土している。

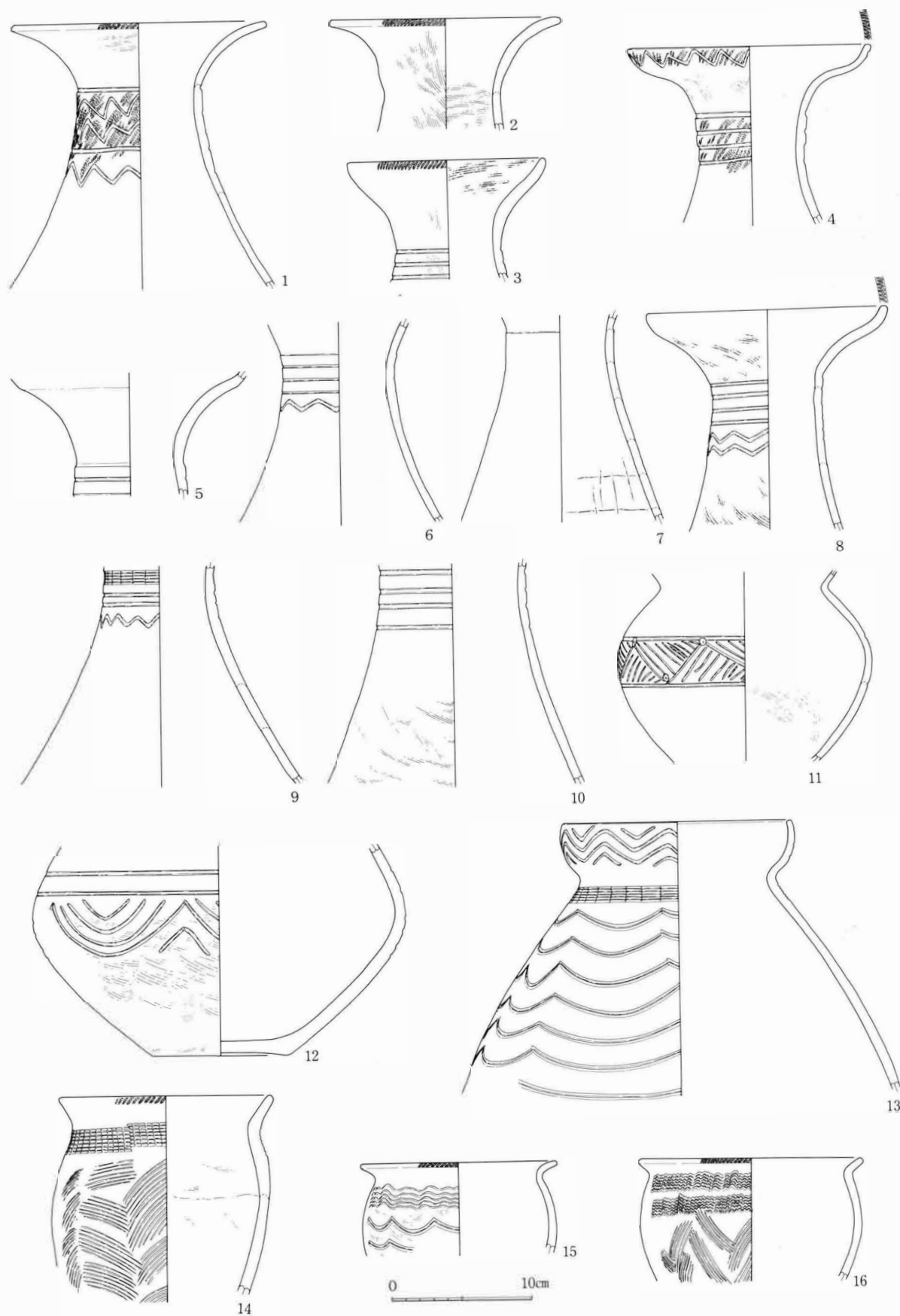


图33 A区7号土坑出土土器实测图



A区7号土坑出土土器

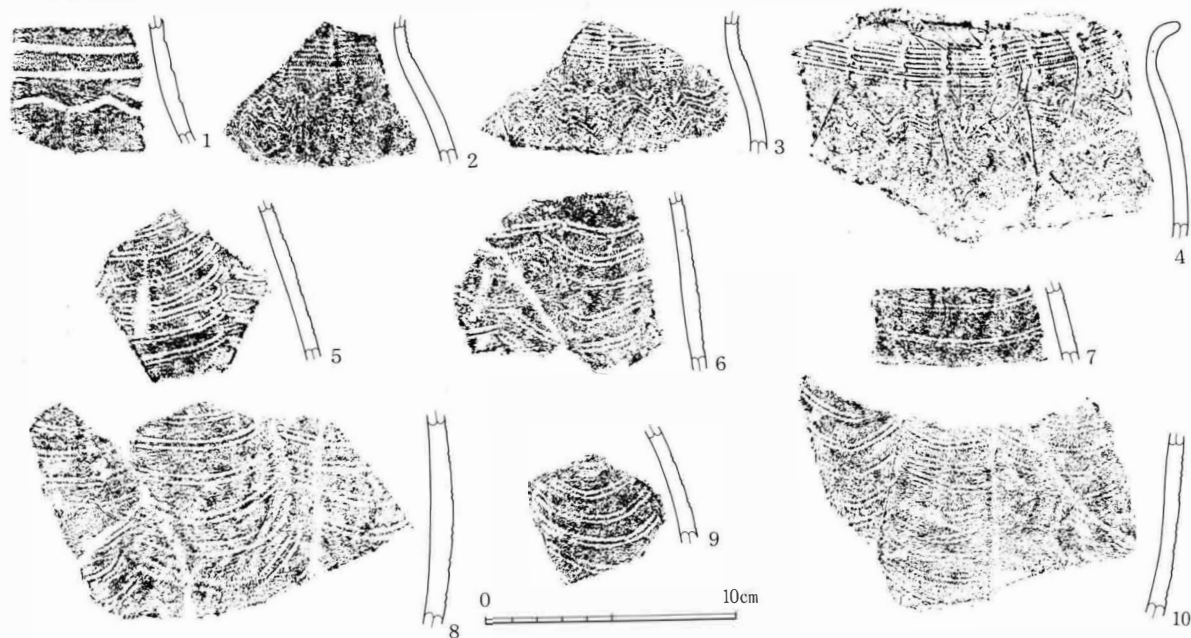


图34 A区7号土坑出土土器拓影

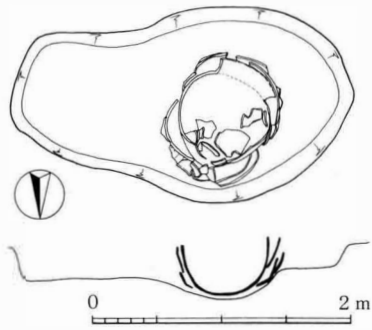


図35 A区8号土坑実測図



A区8号土坑出土土器

A区8号土坑（甕棺墓）

弥生時代後期・箱清水式期の甕棺墓である。墓坑の平面プランは長軸2,70m、短軸1,20～1,50mの不整な楕円形を呈す

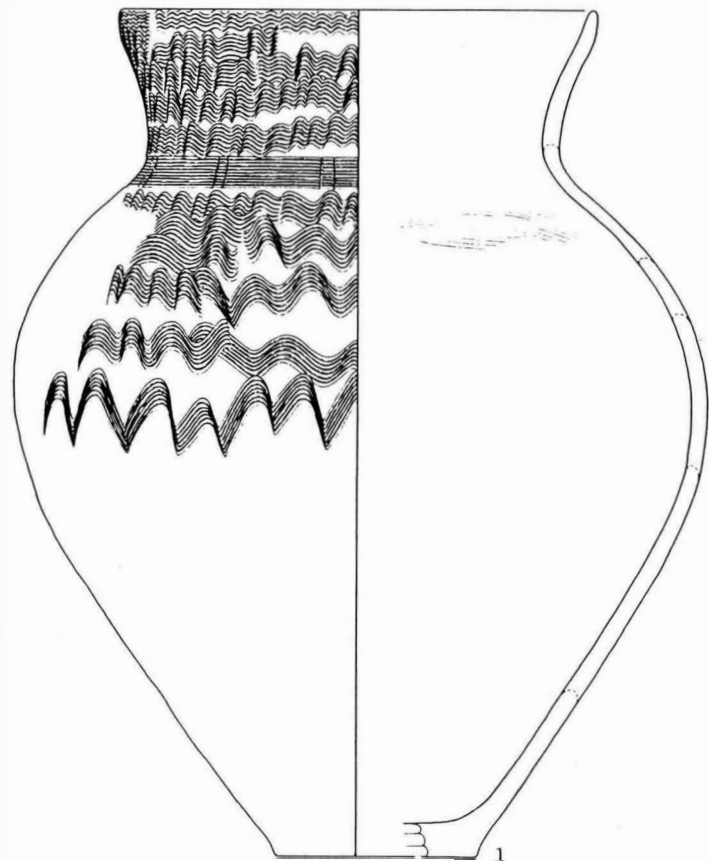
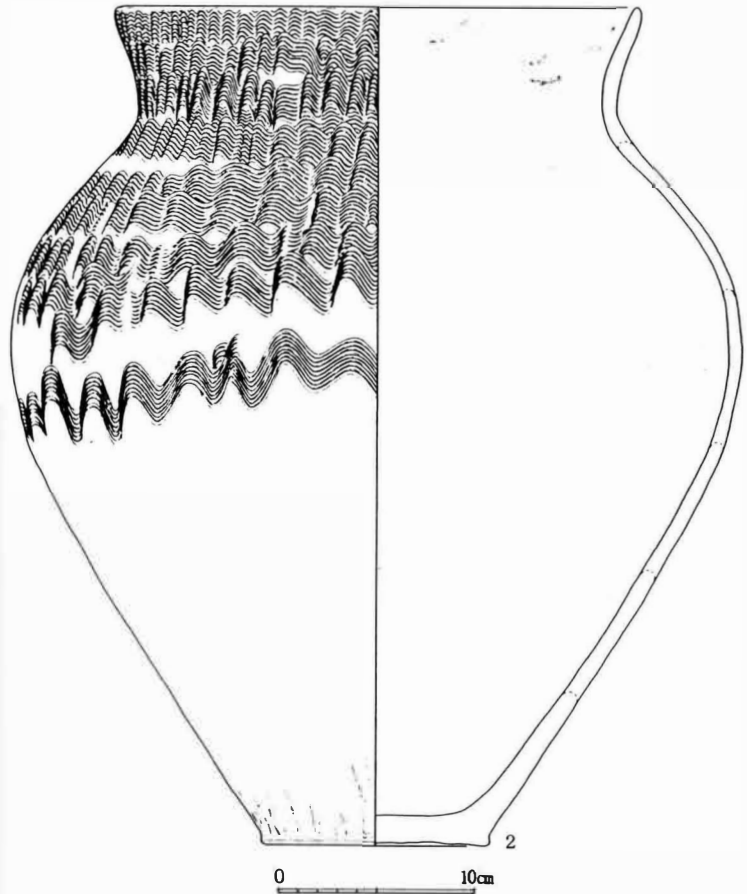


図36 A区8号土坑出土土器実測図

る。墓坑自体の主軸はほぼ東西方向にとるが、棺は口縁部を南側に向けてやや寝せた状態で出土している。棺は(1)を棺体として使用し、破碎された(2)をその周囲や上部にかぶせた状況で検出されている。内部より骨・副葬品等の出土はなかった。

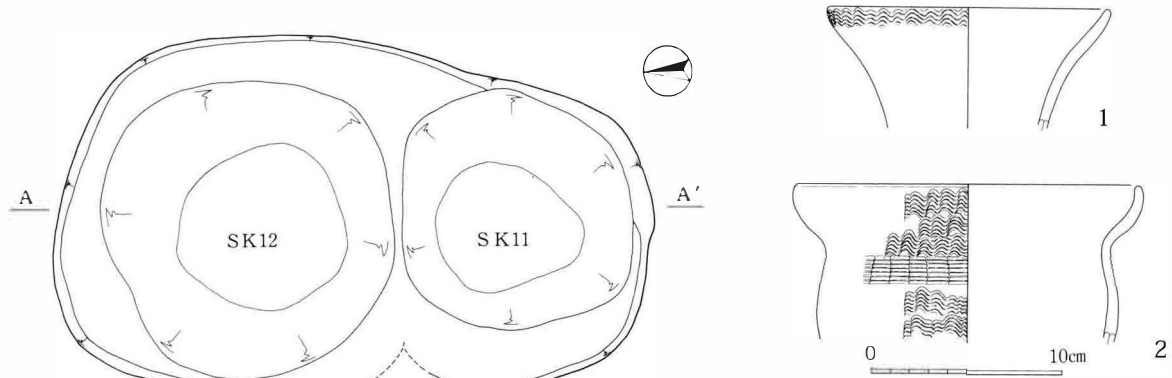


図38 A区11号土坑出土土器実測図

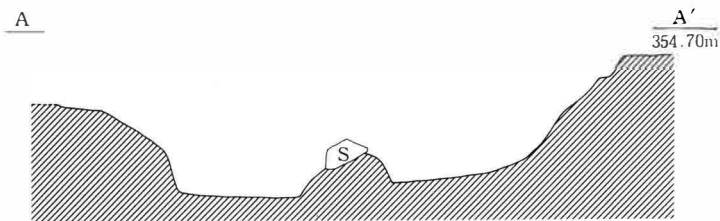


図37 A区11号・12号土坑実測図

A区11号土坑

径1,80mほどのやや不整な円形を呈する土坑で、深さは50~60cm程である。内部より弥生後期前半の土器が出土している。

A区12号土坑

11号土坑の北側に位置し、径2,30mほどの不整な円形を呈する土坑で、深さは60cm程である。内部より弥生中期終末段階の土器が比較的多量に出土している。



A区11号・12号土坑

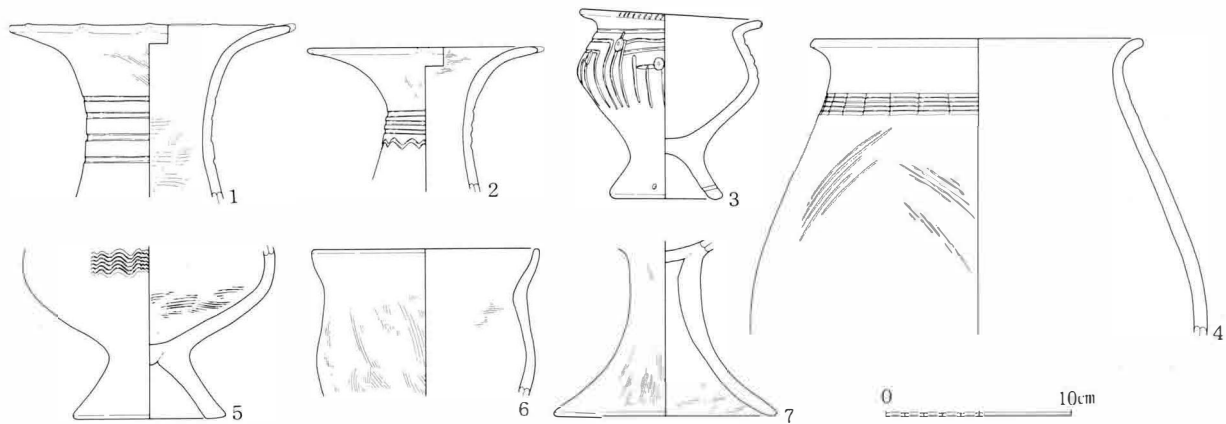


図39 A区12号土坑出土土器実測図



A区12号土坑出土土器



溝 址

A区3～5号溝址、2・6・7号溝址

集落域の北西端に検出されたもので、その位置関係や形態等から、3～5号溝址、ならびに2・6・7号溝址はそれぞれ同一の機能を果たしていた溝群と考えられる。

前者は幅20～30cm、深さ10～20cm程で、3・5号溝址はほぼ平行に走り、4号溝址は3・5号溝址の中央からさらに北東方向に伸びる。溝底から柱穴等は確認されていないものの、柵列として把握される可能性も考えられる。

後者は幅50～70cm、深さ20～30cm程

で、前者溝群の外側にはほぼ直線的に位置し、またそれぞれ掘り残し部分を有する。この掘り残し部分はあるいは出入り口として機能していた可能性も考えられる。これらの溝址はその性格上出土土器も少なく、両者が同時に存在したのかまた時期比定も困難であるが、量的には弥生後期前半の遺物が多く出土しており、南東側に展開する住居群との位置関係からも、居住域を区画する施設として機能していたものである可能性が非常に高い。

番号	種別	法 量 (cm)			遺存度	色調	成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径	底形	器高			外 面	内 面	
A区1号住居坑									
1	壺	20.4			3/4	BC	口縁=ハケ一ナデ、頸部=櫛直線文	口縁=磨き 頸部=ナデ	
2	"	18.7			3/4	B	口唇=山形突起4、口縁=ハケ一ナデ、頸部=櫛簾状文 一櫛波状文一篋沈線1	口縁=磨き・赤彩	P 3
3	"	21.5			完形	C	ハケ一ナデ	ハケ一磨き	
4	"	14.6			1/4	C	口縁=ハケ一ナデ 頸部=等間隔止め簾状文	口縁=磨き 頸部=ナデ	
5	"	21.6			1/3	B	口縁=櫛波状文1、口~頸部=ハケ、頸部=篋切りT字 文	口縁=磨き・赤彩	
6	"	19.2			1/4	BC	口縁=ハケ一ナデ、頸部=櫛直線文	磨き・赤彩	P 4
7	"		7.2		完形	B	頸部=沈線区画一横羽状文・鋸歯文 胴上半=磨き・赤 彩 胴下半=磨き	ナデ	
8	"				1/3	C	口~頸部=ハケ一磨き、頸部=等間隔止め簾状文、胴部= 磨き	口縁=磨き・赤彩 胴部=ハケ一ナデ	
9	"		9.6		2/3	C	ハケ一ナデ	ナデ	
10	高坏		9.0		1/3	BC	調整不明	調整不明	
11	"		12.5		4/5	BC	磨き・赤彩	坏部=磨き・赤彩 脚部=ナデ	
12	甕	14.8			2/3	D	頸部=等間隔止め簾状文一口縁=櫛波状文(上一下)、 胴部=櫛波状文(上一下)	磨き	
13	"	18.6			1/6	D	口縁=櫛波状文(上一下)、頸部=2連止め簾状文、胴 部=櫛波状文	ハケ一磨き	
14	"	16.2			1/6	D	頸部=2連止め簾状文、口縁=櫛波状文(上一下)、胴 部=櫛波状文	磨き	
15	"	15.8			1/4	CD	頸部=等間隔止め簾状文、口縁=櫛波状文、胴部=文様・ 調整不明	調整不明	
A区3号住居坑									
1	壺	24.7			2/3	B	口縁=ハケ一磨きorナデ、頸部=篋切りT字文+棒状工 具刺突 口縁=磨き・赤彩	頸部=ナデ	
2	甕	19.4			1/6	D	口縁=波状文2(上一下)頸部=2連止め簾状文、胴部= 波状文	磨き	
3	"	18.2			1/3	C	口縁=ナデ、頸部=櫛直線文、胴部=櫛波状文1、ケズ リ一磨き	ハケ一磨き	
4	高坏		8.2		完形	B	磨き	坏部=磨き 脚部=ナデ	
A区4号住居坑									
1	壺				1/2	B	口縁=磨き、頸部=櫛直線文4+波状文、胴部=磨き	口縁=磨き・赤彩 胴部=ハケ一ナデ	床直 P 1
2	甕	17.4			1/4	D	口縁=櫛波状文3(上一下)頸部=等間隔止め簾状文、 胴部=櫛波状文	ハケ一磨き	P 2
3	"	15.6			1/2	D	口縁=ナデ 頸部=等間隔止め簾状文、胴部=櫛単科条 痕	磨き	
4	蓋	8.6			4.7	C	つまみ部=指頭押捺、体部ナデ	ナデ	
5	高坏				完形	C	磨き・赤彩	坏部=磨き・赤彩 脚部=ナデ	
A区6号住居坑									
1	壺	20.4			1/3	C	口縁=ナデ、口~頸部=ハケ、頸部=篋切りT字文	ハケ一磨き・赤彩	
2	"	18.7			完形	BC	口~頸部=ハケ一ナデ、頸部=等間隔止め簾状文、ハケ 一ナデ	口縁=ハケ一磨き 頸部=ナデ	床
3					2/3	BC	頸部=等間隔止め簾状文+櫛波状文 調整不明	口縁=磨き・赤彩 胴部=ハケ一ナデ	床
4	高坏	25.6			1/4	CD	磨き・赤彩	磨き・赤彩	床

出土土器観察表 1

番号	種別	法 量 (cm)			遺存度	色調	成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径	底形	器高			外 面	内 面	
A区6号住居址									
5	甕	23.6			3/4	CD	口縁=櫛波状文4(下一上)、頸部=2連止め簾状文、胴部=波状文3(上一下)ハケー磨き	ハケー磨き	床
6	"	26.4			1/5	D	口縁=櫛波状文、頸部=等間隔止め簾状文、胴部=波状文一櫛単科条痕	ハケー磨き	9号住と 接合
7	"	17.4			1/2	D	口縁=櫛波状文2(上一下)、頸部=等間隔止め簾状文	磨き	床
8	"	14.2			1/4	CD	口縁=櫛波状文2(下一上)、頸部=2連止め簾状文、胴部=櫛波状文(上一下)	磨き	
9	"	19.7			1/6	BC	ナデー磨き?	ナデー磨き?	床
A区7号住居址									
1	壺		9.8		2/3	BC	磨き・赤彩、底部=ケズリ	ハケーナデ	
2	甕	15.0	6.6	18.0	1/2	D	口縁=櫛波状文2(下一上)頸部=等間隔止め簾状文、胴部=櫛波状文2(上一下)磨き	磨き	
A区9号住居址									
1	甕	23.4			2/3	D	口縁=櫛波状文4(上一下)頸部=2連止め簾状文、胴部=櫛波状文(上一下)	ハケー磨き	
2	"		8.0		1/3	BC	磨き	磨き	
A区10号住居址									
1	壺	16.0			2/3	BC	口唇=ナデ、面とり、口縁~胴上半=磨き・赤彩、胴下半=ハケー磨き	口縁=ハケー磨き 胴部→ナデ	
2	高坏	13.8			完形	B	磨き・赤彩	磨き・赤彩	
A区1号土坑									
1	壺	19.4			3/4	B	口唇=山形突起、頸部=L R縄文地文一沈線区画、篋単斜線文、波文 調整不明	口縁=調整不明 胴=ハケーナデ	
2	"	19.2			完形	B	口唇=山形突起、口縁=ハケー磨き、頸部=縄文地文一沈線区画?	口縁=ハケー磨き 頸部=ナデ	
3	"	18.6			2/3	B	口縁=ハケ、頸部=沈線区画、櫛直線文2、櫛波状文垂下	ハケ、ナデ	
4	"				1/3	B	口縁=ハケーナデ、頸部=縄文地文一沈線区画、懸垂文	調整不明	
5	甕	22.4			1/3	C	口唇=L R縄文、頸部=櫛波状文2、胴部=櫛縦羽状文	ハケー磨き	
6	"	12.6			1/3	BC	口縁=ナデ、胴部=櫛縦羽状文、調整不明	ハケー磨き	
7	"	16.5			1/2	D	口唇=L R縄文、胴部=篋重連弧文 ハケ	ハケー磨き	
8	無頸壺	11.6	6.0	12.4	1/3	B	2孔一対の緊縛孔、磨き・赤彩	調整不明	
A区5号土坑									
1	壺		9.8		完形	B	頸部=L R縄文地文一沈線区画、胴部=ハケー磨き、底部=ケズリ?	調整不明	
2	"	16.0			2/3	B	ナデー磨き、口唇=L R縄文	ナデー磨き	
3	"		6.4		完形	B	磨き	口縁=磨き 胴部=ナデ	
4	"	9.3	5.8	18.2	完形	B	ハケー磨き	ナデー篋ナデ	
5	"		5.8		2/3	BC	ハケー磨き	ナデ	
6	甕	16.5	7.1	15.7	完形	CD	口唇=L R縄文、胴上半=ハケ、胴下半=ハケー磨き、2次焼成受ける	ハケーナデ	
7	"		7.0		2/3	D	櫛縦羽状文、磨き、底部=ケズリ	磨き	

出土土器観察表 2

番号	種別	法 量 (cm)			遺存度	色調	成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径	底形	器高			外 面	内 面	
8	蓋	20.6		7.5	3/4	CD	ツマミ部=指頭押捺、体部=ハケー磨き	ナデ	
A区7号土坑									
1	壺	18.0			3/4	B	口唇=L R 縄文、口縁=磨き、頸部=縄文地文一沈線区画・篋波文、磨き	口縁=磨き 胴部=ナデ	
2	"	16.6			2/3	D	口唇=L R 縄文、口~頸部=ハケーナデ	ハケー磨き	
3	"	14.2			1/4	B	口縁=L R 縄文、ハケー磨き、頸部=篋沈線	ハケー磨き	
4	"	17.6			3/4	B	口縁=縄文一山形文、頸部=縄文一篋沈線、ハケー磨き	口縁=磨き 頸部=ナデ	
5	"				1/4	B	口縁=ハケー磨き 頸部=篋沈線	調整不明	
6	"				1/2	B	頸部=篋沈線・山形文 調整不明	調整不明	
7	"				2/3	B	頸部=篋沈線による段 ハケー磨き	頸部=磨き 胴部=篋ナデ一ナデ	
8	"	17.5			3/4	B	口唇=L R 縄文、口縁=ハケー磨き、頸部=篋沈線・山形文 ハケー磨き	口縁=ハケー磨き 頸~胴部=ナデ	
9	"				2/3	BC	頸部=等間隔止め簾状文、篋沈線、波文 調整不明	調整不明	
10	"				1/3	BC	頸部=篋沈線 胴部=ハケ	調整不明	
11	"				2/3	BC	磨き、篋描複合鋸歯文	口縁=磨き 胴部=ハケーナデ	
12	"		9.8		3/4	B	ハケー磨き 篋描重連弧文	調整不明	
13	甕	16.4			3/4	BC	口縁=篋重山形文、頸部=櫛等間隔止め簾状文、胴部=2本一対の篋による重簾弧文	ナデ	
14	"	15.3			完形	D	口縁=L R 縄文、頸部=櫛等間隔止め簾状文、胴部=櫛縦羽状文	ハケー磨き	
15	埴	14.1			2/3	D	口唇=L R 縄文、頸部=櫛波状文1、胴部=2本一対の篋状工具による重連弧文	ハケー磨き	
16	"	16.2			3/4	D	口唇=L R 縄文、頸部=櫛波状文2、胴部=櫛縦羽状文	ハケー磨き	
A区8号土坑									
1	甕	24.5	10.3	42.9	2/3	CD	口縁=櫛波状文(上一下)、頸部=2連止め簾状文、胴部=櫛波状文(上一下) 磨き	ハケー磨き	
2	"	27.0	11.6	42.6	3/4	CD	口縁~胴上半=櫛波状文(上一下) 胴下半=ハケー磨き	ハケー磨き	
A区11号土坑									
1	壺	15.0			1/3	B	口縁=櫛波状文1、口縁~頸部=磨き	磨き	
2	甕	18.2			3/4	BC	口縁=櫛波状文3(下一上) 頸部=等間隔止め簾状文、胴部=櫛波状文(上一下)	磨き	
A区12号土坑									
1	壺	17.2			2/3	B	口唇=山形突起、頸部=篋沈線 調整不明	口縁=ハケー磨き 頸部=ハケ	
2	"	12.2			完形	B	口唇=山形突起、頸部=篋沈線、山形文 調整不明	ハケ 調整不明	
3	甕	9.8	6.0	9.9	完形	C	口唇=刻み、胴部=コの字重ね文	磨き	
4	"	18.0			1/3	B	頸部=等間隔止め簾状文、胴部=櫛縦羽状文	調整不明	
5	"		8.2		3/4	B	胴部=波状文1、調整不明	ハケー磨き	
6	"	10.9			1/3	CD	ハケーナデ	ハケーナデ	
7	高坏		12.0		3/4	B	磨き 赤彩	坏部=磨き・赤彩 脚部=ハケーナデ	

第4章 総括

二ツ宮遺跡A区の調査では、弥生時代後期前半のきわめて良好な集落遺跡を検出した。以下調査所見から遺跡の性格を瞥見し、調査の総括としたい。

集落の形成は、弥生時代中期後半の粟林式終末段階から開始される。ただし今回の調査区では住居址は検出されておらず、土壇のみである。第1分冊にて報告したFM5区16号住居址ならびにFM3区下層15号・16号住居址などの存在を考慮するならば、当該期の集落の中心は本調査区より南東側に展開することが予想される。

この中期終末の集落は、そのまま継続することなく、次の後期前半の集落の形成まで、土器型式にして一型もしくは二型式ほどの断絶が認められる。

この傾向は浅川扇状地内に存在する他の遺跡においても共通してうかがわれる傾向であり、また粟林式期の大規模集落と箱清水式期の大規模集落が重複する例も現状では認められない。生産構造の差異等何らかの原因が存在するのであろうが、今後の検討課題である。

中期集落の衰退後、再び集落の形成が見られるのは後期前半に至ってからである。出土土器の様相からは、後期の第2段階と想定される。

遺構の分布状況からは、今回の調査地点は当該期集落の北西端部分に位置するものと考えられ、調査区中央から南側の部分に住居址が集中し、その外延に土壇が散在し、さらにその外側をいくつかの溝によって区画し居住域を限定している状況が看取し得る。

発掘調査によって当該期の集落構造が明らかとなった遺跡は県内でも希少であり、今回の調査により得られた成果は注目されるべきものがある。

この後期前半の集落も、各住居の主軸方向からは大きく2群に大別される。ほぼ南北方向に主軸をとる1号・4号・6号・9号住居址とそれに斜行する主軸の2号・3号住居址である。両者の差異が時間差であるのかそれとも同一集落内での各住居のもつ構造的な差異であるのか、後者から出土した土器も少なく明確にはなし得なかったが、究めて興味深い問題であろう。

ただ、柱穴配置や炉の位置など、住居址自体の構造からは、両者の間にあまり大きな時間差は想定し得ない点を指摘しておく。

後期前半段階のこの集落も、比較的短時間にて衰退するようであり、後期後半へと継続してゆくことはない。10号住居址出土の壺型土器は、赤彩されている点を除けば在地にその系譜を求め得ず、北陸地方の影響が色濃くうかがわれるものと考えられる。共伴している在地の小型高坏からのみでは、細かい時期比定は困難であるものの、集落の継続期間が比較的短時間である可能性が高い点を考慮に入れると、この土器もまた後期前半段階に伴うものである可能性が高く、弥生時代後期段階における北陸系土器の流入の開始時期を従来の見解よりもさらに遡らせることになる。

以上調査所見から本遺跡の性格について概観した。紙数の都合から本書では二ツ宮遺跡B区、ならびに本堀遺跡の調査に関してはその概略にふれたのみとなってしまった。ご容赦願いたい。

最後に本遺跡の調査から整理・報告書作成にいたるまでご指導・ご協力を賜った関係者各位に心から感謝申し上げ調査の総括としたい。

長野市の埋蔵文化財第47集

ニッ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡

－第2分冊－

平成4年3月25日 印刷

平成4年3月30日 発行

編集 長野市教育委員会

発行 長野市埋蔵文化財センター

印刷 奥山印刷工業株式会社